
赤い糸

花戸 紗世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い糸

【Zコード】

N7236M

【作者名】

花戸 紗世

【あらすじ】

運命って、信じますか？

才色兼備の完璧な義兄、翔馬の心を奪いながらも、八歳年上で元N.O.ホストのパティシエとの淡い恋を守り抜こうとする、けなげな女子高生、綾瀬リサの物語。

lovesickness

その人と初めて会ったのは、私とその人以外誰もいない夜の公園。捨てられた仔犬のような、でもどこか人生を諦めたような眼をしたあの人には、私は心を奪われた。

私が家から逃げたのは、とても簡単な理由。

義兄あにが、怖い。

ただそれだけ。

…ある日、義兄は両親が不在なのを見計らって、いきなり私を押し倒しキスをした。

1年前に父が再婚した相手の女性の連れ子で3歳上の義兄。まさかという思いでいっぱいだった私は、なんとか逃れようと無我夢中に近くにあつたガラスの置物で義兄の頭を殴り、義兄が怯んだ瞬間急いで家を飛び出したのだ。

あまり人気の無いその公園にやつとたどり着いてベンチに座った私は安心し、ようやく涙がこぼれてきたのを憶えている。

ひとしきり泣いて、落ち着き辺りを見渡すと、いつの間にか私が座っていたベンチの端にその人がいた。ベンチの右端左端に私たちはずつていた。

その人の腕の中には一匹の白く大人しい子猫。

今まで泣いていたのを見られていたのかと、赤面しながら私は取り敢えず空を見た。

私は涙を流すと空を見上げる癖があった。

そうすると、早く涙が乾く気がするから。

その人は私が意識していないと本当にいないように感じるほど…

空気のようなというか、不思議な雰囲気をした人。

それでもまだ座っているなどわかるのは、時折薄く香る煙草の匂い。

私はかなりの時間星を見ていた。途中チラシとその人を見るとその

人も同じように空を見ていた。

しばらくそうしていたが、ニヤアと白猫が鳴き、その人もゆつたり

とした所作で立ち上がった。

私は何となくその人を見ていたら、彼は面倒そうに顔を歪ませ私を見た。

「……家、帰れよ？」

そう言われ、私は落胆した。ああ、この人もやはり人間だったのか。その透き通るようないい肌に忠実に幽霊とかならよかつたのに。

「……はい」

につこり笑つてそう言つた。なるべく元氣そうに、につこりと。早く、私なんか構わず帰つてくれないだろうか。私の念じが伝わつたのか、その人は帰つていつた。

そして私は軽く笑い、もう両親が帰つているはずの家に戻つた。

「…リサ！こんな時間までどこに行つてたんだ。翔馬君しょうまが大変だつたんだぞ、頭を打つたらしい」

父は慌てた様子でリサをリビングに連れていった。

そこには綺麗に化粧をした顔を涙で歪ませた継母の由梨と頭に包帯を巻いた義兄が並んでソファーに座っていた。

由梨はリサを見つけると少し微笑み、はあとため息をついた。

「…」の子、…」
父は笑つて応えた。

「翔馬君は毎日遅くまで勉強しているからな、疲れていたんだろ？」「

義兄は、はは、と軽く笑声を立てた。

「すみません、心配をかけて。母さんも、別に大丈夫だから」

恥ずかしそうに笑う義兄は、由梨や父の顔を見てはいなかつた。
由梨と父が顔を見合わせ義兄から目を逸らした瞬間、義兄は私に向かつて笑いかけた。

「…じゃあ、私もつ寝るね、おやすみなさい」

「リサ。どこへ行つてたの？」

階段を登り始めた私に義兄が声をかけた。

不自然なほど甘く優しい声に私は思わずビクッとして足を止める。

「え…と、公園に行つたの。友達に…会つた

あまりにおどおどとした私に、なにを勘違いしたのか由梨が涙ぐんだ。

「リサちゃん……あなたが家に居なかつたから翔馬が怪我をしたわけじゃないわ、気にしないで。優しいのね」

「え……」

『懶つてリサに父はヒラヒラと手をふつた。

「ほひ、今日はもう休みなセコ。明日も早いんだから。』

「…………うそ」

私は重い足で階段を登つた。

lovesickness2

「それにしても羨ましーよねー」

「ね。棚ぼたつてやつ?少女漫画みたい。…あつ、ほらいた!」

たくさんの人数で固まっている女子生徒たちは教室から窓の外でサツカーをしている、ある男子を見て一斉に頬を染めた。

「かつこいいよお…」

誰かの咳きはその場にいた女子を額かせた。

昼休み、サツカーをしているのは大人数いるが、なかでもひときわ目を引く整った容姿。少しきせのある髪をうざつたそこに耳にかけるその姿は、どこまでも爽やかだった。

彼女たちが食い入るように見詰めるのは、進学科三年の綾瀬翔馬。あやせじょうま。近所でも有名な才色兼備の彼、翔馬を語るときに外せないのが、一年前から義妹として同居している綾瀬リサについて。

元々同じ学校に通っていた一人でも、そんなに群れないタイプのリサは目立つ方では無く、知名度的には対称的だつた。が、彼が兄となつてからはリサも同じように有名人となつてしまつたのだ。だが、ほとんどは棚ぼたつてリサに向けられる日は良いものではない。リサを本当の妹のように可愛がる翔馬の姿も、リサに対する嫉妬に拍車をかけている。

この日も、それは例外では無かつた。

「ねえ、何？あの包帯」

「はい？」

リサは弁当を食べる手を止めて、派手に化粧をした相手を見た。そのポーネテールの女子は、薄く笑いながらリサに訊いた。

「一緒に家なんだから知ってるよね？教えてよリサ～」

どうやらただ翔馬の情報が欲しいだけらしい、当然リサがつけた傷だという事は知らないようだ。

大方、所属するファンクラブの部長にでも頼まれてんだろう。

リサは弁当を片付けながら首を傾げた。

「さあ、なんでかな？帰つてきたらもつ怪我してたから、よく知らないんだよね」

ええ～と不満そうな声をもらすポーネテールを置いて、リサは教室を出た。

放課後、とほどど家に帰つていると、川の向こうで、女の子が手を振つているのが見えた。

「リサちゃん～ん」

「...琴莉ちゃん！？」

慌てて橋を渡り、異様に可愛い恰好をした琴莉のもとに向かう。

「な、どうしたの琴莉ちゃん。……イベント？」

琴莉はボブの頭に黒いメイドカチュをし、ヒラヒラふわふわしたスロリーチックなドレスを着ていた。

また、猫耳で洋風な顔立ちの琴莉にとてもよく似合っている。

琴莉は誇らしげにクルリと回った。

「違いますよ、これ、制服です。」

そう言つて琴莉は後ろの看板を指差した。

真っ白な看板に可愛らしく茶色の文字で書いてあるのは……。

「スイーツカフェ、『家絵貴』」

琴莉の楽しそうな声を聞きながら、リサは苦笑した。

「すごい名前。琴莉ちゃんはバイトしてるの？……っていうかまだ中学生だよね」

琴莉はあちゃーといつ風に頬をかいた。

「オーナーシェフと私、親戚で。この制服がどうしても着たかったんで、夏休みの1週間だけ勝手に職場体験させてもらつてたんですよ。でも、それも明日で終わりなんですよねー」

残念そうに話す琴莉は、それで、とリサを見た。

「せりあ、辞めるついでに新しいバイト探して」こうして言われたんですよ。で、休憩になつたんで外に出てみたら、リサちゃんが

「バイト?」

リサは少し興味を持つた。

「私、してもいいの?」

琴莉は目を輝かせた。

「やつたあ。時給900円、日祝日は休みです!」

琴莉は嬉しそうにリサを店の中に連れていった。店内は意外と広く、可愛らしいけど品が良く落ち着いた雰囲気だった。
ここなら、あの制服がとても合つだらう。

「てんちょー!見付けました新しいバイト。琴莉の近所のお姉さん
で、綾瀬リサちゃんデス」

「こ、こんにちは綾瀬です。田雲高校一年です」
驚きを隠せないリサはおどおどとお辞儀をした。
なんと、オーナーシェフは黒いサングラスに鬚を生やしたちょいワ
ル風のおじさん……。

オーナーは、げつという顔をした。

「また未成年か……」

固まつたりサとは対称的に琴莉は口を尖らせた。

「ショーガないですよ。こんな可愛い制服なんだし。つていうか今更じゃ無いですか？瑠璃花さんも高一だし。ま、私はまだ中二なんでダメかもだけど」

「あの、無理なら…」

おひおひおひのリサにオーナーは軽く手を振った。

「いや、大丈夫。ショウがない、何とかなるだろ。あ、じゃあ明日からよろしく。わからない事は琴莉や瑠璃花に訊くと良い」
しかもそれだけ言つとさつと厨房に引き返して行つてしまつた。

呆然とするリサに琴莉はハイ、と制服を差し出した。

「これは試着用みたいなモノですけど。あとで梓さんが…あ、オーナーの奥さんがちゃんとサイズ測つてオーダーメイドの制服をくれますから」

奥の部屋で着替えながら琴莉と話す。

「え、楽しみ。似合つか心配だけね。あ、すごいね、オーナーさん」

琴莉はクスリと笑んだ。

「びっくりしたでしょ？オーナー。まあ、あのサングラスにもいろんな理由があるんですよー…。すごく良い方なので大丈夫ですよ」

「そりなの？嫌われたのかと思つちゃつた…。出来た」

思つたより着心地のよい制服に思わず頬が緩む。

琴莉も嬉しそうに手を叩いた。

「可愛いですよー」これなら瑠璃花さんにも負けないですね。あ、言
い忘れてましたけど、梓さんはlittle roseのトザイナ
ーで、設立者でもあるんですよだからその制服はちょっとレアな
んですね」

little roseって、あの高級ブランド!?
なんか不可思議すぎるカフコだ、とリサは苦笑した。

先に琴莉は帰ってしまったので、リサは先輩で同じ年の瑠璃花と話
していた。

瑠璃花は、誰もが美しいと思つだらつ今までテレビや雑誌でもお田
にかかつた事の無い超美少女で、琴莉はああ言つていたがリサはど
う頑張つてもこのレベルにはなれないと自分で頷く。

瑠璃花は家絵貴の息子と幼なじみで、2年前から遊びにくるついで
に店を手伝つよくなつたといつ。

お金は貰つてなかつたからええの、と言つてこる。

「リサちゃん、部活はしてんの?」

ショーケースにケーキを入れながら瑠璃花はリサに尋ねた。

「あ、帰宅部です」

「そりなんや。助かるわー。琴莉が辞めたら仕事増えてびーしょー
て思つてたからな。一瞬、私の友達つれてこよか思たけど、多分こ
の制服似合わんし」

瑠璃花はニヤツと笑つた。

「ああそつや、それこそウェイターの恰好させればええんか。今度梓さんに頼もかな」

心地よい音で「ロロロロ笑いながら話す瑠璃花にリサは一気に好感を持った。

「あ、リサちゃん。今田好きなケーキ持ち帰つてえつて。オーナーがゆつてた」

思わず田を丸くして驚く。

「本当に…え、じゃあどれにしようかな」

ジーツと選んでいると突然オーナーの声がした。

「おすすめはショート家絵貴とティラミスだよ
ギヨツと振り向いたリサは自分の田を疑つた。

「あ、なんや剛さんまだサングラスしてんの?…といいや、ほひ」

そう瑠璃花に無理矢理取られ、素顔を見せたオーナーは、さつきと全く別人だった。

しかもなんか髭もない。

瑠璃花はあきれたようにため息をついた。

「おーかた、ずっと寝てなくて腫れた田を隠そつとサングラスしてたんやろ? そんでいま急いで髭剃つて來たと」

瑠璃花は手鏡を剛に向け、剃りが甘いアハをつづした。

「……新商品作ってたら寝れなくてね。… そんなに美味しそう?」

剛と瑠璃花そっちのけでケーキを見詰めるリサに剛は微笑んだ。

「家族分持つてかえつていいよ」

「わあ…！ありがとうございます」

瑠璃花はやれやれと肩を落とし、客の注文をとりに行つた。

lovesickness

リサは、客が去ったテーブルを片付けながら、少し夕暮れた窓の外の電柱を見た。

(あ、もう一時間たつたんだ)

「瑠璃花ちゃん」

休憩時間、リサはふふっと微笑んで瑠璃花に話した。

「さつき、またあの人いましたよ。くつきりした綺麗な顔の、えつと、玲生さんだっけ」

「……ストーカーやな」

いつもより怒氣が強い瑠璃花にリサは驚き、食べていたスイカの新スイーツから皿を離してしまった。

「る、瑠璃花ちゃん？」

「ありえへん、なんなんあいつ。そんな今更知ったかされてもシラソつちゅーの。事実知ったからなに?なーに期待してんのか知らんけどなあ。一時間」とに電柱へばりついでーすんの。なに考えてんのアホが」

まるでそこに玲生がいるかのようにクッショönに怒りをぶつける瑠璃花。

だがリサには、その頬がほんのり赤らんでいるようにみえた。

(いいなあ、瑠璃花ちゃんキラキラしてる)

まるで自分とは大違ひだ。

リサは気を取り直し、シャーベットを口に運んだ。

ガラツと部屋の扉が開く、その奇跡のような瞬間までは。

「へえ、リサ、バイトを始めたか。勉強には支障は無いのか？」

夕食時、父の不安そうな顔にリサは微笑んだ。

「大丈夫。バイトの先輩が鈴岡学園の人でね、頭よくて解けないと
こは教えてくれるから」

義母、由梨も楽しそうに微笑んだ。

「良かつたわね。カフェなんて素敵。このケーキもとても美味しい
わ」

リサは時々、売れ残ったスイーツを買って家に持ち帰っていた。

自分が食べたいのもあるが、何より家族の笑顔が見れるのが嬉しか
つた。

それに、リサはある気がかりもあつた。

夕食も終わり、由梨は片付けでキッチン、父はテレビを見に別の部
屋にいき、リサは翔馬に話しかけた。

「あの、お兄ちゃん」

吃驚したように一瞬ポカンと口を開けた翔馬だが、慌ててキリッとした顔になった。

翔馬としては、もう覚悟は出来ていた。

「ん？ どうしたの」

「……」めんね、お兄ちゃん。私、つい取り乱して、殴っちゃつたりして。お兄ちゃんは別に…そんなつまづきじゃなかつたのに

「…………く」

「わかつてゐる。あの日はお兄ちゃん、なんか…。帰つて来てから隠れてずっと泣いてたし、誰かにフラれたんでしょ？で、悲しくて慰めて欲しくて私に抱きついて、事故でキスしてしまつたと」

「え、ちょっとリサ？」

事故扱い？え、ていうか泣いてたの見られてた？

ショックで口を魚のようにパクパク動かす義兄にっこり微笑んだリサはポンと翔馬の肩を叩いた。

「元気だしてね」

フられたの、多分初めてだつたのかなあ。

イケメンも苦労するね。

リサはうそつと優しい田で頷いて、部屋に帰らつて話を向けてた。

「…………おじ？」

翔馬はまた湧き出でてくる涙を感じ、なんとかリサを呼び止めた。

「つづリサ、い、いのせこだから訊くけど」

「え、なに？」

くぬりと振り向いたリサに翔馬は思わず息をのんだ。
決して美少女ではないだろう、多分可愛い、というほうが似合ひ妹。
だが、言わすもがな、翔馬には誰よりも輝いてみえた。

「リサ、いま好きな男とかいるの？」

俺でも構わないよー

リサは翔馬の願いを知るよしもなく……。
パツと頬を薔薇色に染めた。

「え…いるの？」

愕然とリサの顔を食い入るように見詰めていた翔馬にリサはぶんぶん顔を横にふった。

「ちつ違つーまだ、ちゃんと話もしてないし」

リサはしょぼんと肩を落とした。

「…彼女、いるとと思つ」

そつ、和葉かずはと名乗つたそのヒトの手首には、きれいな細いブレスレットがあつた。

一度、雑誌で同じものを見たことがあるから、あれはペアだとわかる。

やつぱり、一目惚れはよくないな…。

「だから、いいの」

リサは薄く笑い、翔馬におやすみと小さく呟いた。

「いやら、うちのパーティションの有明和葉さん。ありあけかずは去年までフランス留学して、今年からうちで働いてもらつてゐる。俺の従兄弟。A型、双子座、24才」

可愛らしい容姿の、店長子息、翔太さんに紹介されたソノヒトは、公園であつたときのぼんやりとあまり人を寄せ付けない雰囲気は微塵も感じさせない柔らかい微笑を浮かべた。

「よろしくお願ひします」

「よろしく、よろしくお願ひします」

ペコッとお互い軽く頭を下げ、リサと和葉はケーキの補充をしにシヨーケースへと向かつた。

隣にしゃがみこんだ和葉から、甘い香りが漂つてきた。

「あ、リサさん」

和葉は運ぶケーキから手を離さず声をかけた。

「はい？」

「前、泣いてたのリサさんだよね」

「…あ、はい」

クスリと思わず笑みがこぼれた。

「やつぱり。なんで？」

気になる、というより仲間として仲良くしようとした感じで和葉は訊いてきた。

「うーん……今思えば私の卑とちりだつたと思つんですけどね」

そう言つて応えなかつたら、和葉も黙り込んだ。話題を探そうにも、氣まずさが流れる。

「あっ、あの綺麗なネコ、和葉さんが飼つてるんですか？」

和葉は追加のロールケーキを運んできながら初めてみる満面の笑みを浮かべた。

「アハ。俺のネコ。可愛くない？」

「あつ、ぐく可愛かったです。由くて大人しくて」

「だら~//ー口つて言つんだ。……あ」

和葉は思い出したように頬に手を当てた。

「煙草、吸つてたの秘密な？前に剛さんにパーティショは煙草吸わないよな~って笑顔で念おされたからこわいんだよ」

「あ、このバーラの匂いつて」

「そりそり。一応夜しか吸つてないんだけどな?わかんないだろ」

クスクス笑つて和葉は厨房に向かう。

和葉の手首の細いチョーンがサラリと鳴つた。

lovesickness4

「文化祭?えー何するん?めっちゃ行きたい」

「私のところはまだ決まってないんですねー」

リサは苦笑いを浮かべ頭を傾げた。

「瑠璃花さんのところはいつですか?」

「うちはな…。家族以外入っちゃダメで娛樂系全部禁止やねん。だから研究とかばつかでおもらないで?アイドル部も各学年の発表に馬鹿馬のように使われて」

「きつそーですねー」

クスッと笑うリサに瑠璃花は本気で辛そうなため息をついた。

そんな一人に和葉がおーいと声をかけた。

「そろそろ客が来る時間だからー。仕事しろよー?」

慌てて一人で声を揃えた。

「はーい!ーー」

「…なんかすいません…兄が…」

「いや別に。ケーキ！」まで減るのは予想外だつたがね～？」

厨房の中でも店の賑わいが伝わってくる。

数分前、店を訪れた兄は友人の柚樹大雅ゆずきたいがと、あの珍客を引き連れてきた。

「やつほつりサ バイトどう? 楽しんでる?」

なんだか数日前から人格がガラリと変わった兄は、眩しいほど笑顔で手を振り店に入ってきた。

「お、お兄ちゃん?」

「惑うりサより先に、瑠璃花が青い顔をして叫んだ。

「あー……あんたナ一玲生連れてきてんのあほひやうか！？」

「なんだよ。俺はケーキが食べたくて……この人にこの店連れてきてもらつたんだよ。……あ、すいません、ありがとうございます」と言はず知らずのかた

ムツとしたように玲生は言い返し、ペコリと翔馬に礼をした。

「見ず知らずの……ってあんたなあ」

「はいはい、お坊っちゃんがた席にお連れしてー。ほり、瑠璃花こ」

注文

和葉は少しイラッとした顔でにっこり笑つた。

そんな和葉を、翔馬がジトッとにらんでいるのにリサは気が付かなかつた。

そして、席に着くとすぐに大雅が大量のケーキを注文した。

「んー、今日のおすすめで抹茶クリーミ家絵貴と、葡萄タルト、シヨート家絵貴、ベイクドチーズ家絵貴、アップルパイ、プチティラミス、ショーム家絵貴、あまとろプリンと…ダブルレアチーズ。俺は取り敢えずそんだけ」

瑠璃花の爆笑が忘れられない。

そしてかなりの商品が刻々と今もなお消費されているため、本来ウエイトレスのリサまで厨房で林檎を切つたりといった仕込みを手伝つていいのだった。

「琴莉ちゃん、これショーケースにいれといて、お願ひね」

「はあい、了解です」

まさか人員不足になつて琴莉まで駆り出されるとは思わなかつた。

(食べ過ぎでしょ!柚樹先輩!)

まるで嫌がらせのようだ。まあ、売上は上がるのだろうけれど。

(でも…ちょっと得したかも)

小麦粉を計りながら、チラッと和葉を盗み見る。

スポンジにさつさとクリームを塗つていく姿はどこまでもストイック

クなかんじと気品が溢れていた。

(かつじこー。やつぱつす"こなあ)

やつぱつに思つていて、急に和葉はチッと舌打せした。

「あつえねーあのオヤジ。このこつそがしい時に夫婦旅行いくなよ！つとかせめて店閉めてけつづーの」

あーもう腹立つ。と愚痴りながらもちゅうちゅうとロールケーキを丸めていく。

「ねえ、なんのあの大食漢。食うんなら太れよ！ナーニあの細さバカにしてんの。だいたいこの暑いのに濃い顔で堂々とスイーシーうなよー」

あまりの毒舌に少し付いていいないりサは慎重に卵を割りながら相づけをついた。

「…柚樹先輩は、昔から甘こもの好きらしいです。ちなみにおウチは和菓子屋さん」

「…マジドー。あーもうダメ。やる気でねービーしょ」

座り込んでしまった和葉にリサは本氣で慌てた。

「や、頑張りましょーえっと、ほら柚樹先輩も美味しいから食べてくってるんでしょー」

「…」

「あー…いや、あいつはまだいいんだ。後の一人つて、女田町できてんだろう？それがムカつく。ケーキ食わねーんなら席空けろよな」

いや多分、柚樹先輩が三人前以上食べてるんでしょつけれども。

リサは前半の言葉に首をひねった。

「え、うちのお兄ちゃんって女田町でだつたんですか？全然わからなかつた」

確かに瑠璃花は絶世の美少女だし、琴莉は昔から可愛いしどっちだろう？

「……ふうん？」

本気か？この鈍感娘。

今時もう絶滅したと思つてた。

「えー…と、お前のおニーちゃんつて、あんま似てないけど」

「あー。そーなんですよね。父の再婚したひとの連れ子さんで。血縁は無いんですね」

「あ、なるほどねー」

(かわいそ、オーネーチヤン。前世でどんな悪いことしたんだ?)

急に黙り込んだ和葉に琴莉が叫ぶ。

「マジでヤバイですってー。プチトイヒスヒシニアーテ【家絵貴】、もひ
全部あのお客さんのお腹の中ですー。」

lovesickness4（後書き）

分かりづらいのですが、翔馬の親友でクラスメートの柚樹は、本名、
柚樹大雅といいます。柚樹は名字です。

lovesickness

今日もお兄ちゃんは店に来た。

「頑張つてね～？リサ」

「…お兄ちゃん、性格変わったよね？」

「へ、そお？ま、こつちが素なんだけどね？」

自覚あるんだね…。

前は、近寄りがたいクールで静かな印象だったが。リサとしては、こちらのほうが話しやすいし、幼い頃とあまり変わらず接する事ができるから、嬉しいのだけれど。

「ねえ、ちゅーもんいい？」

「はーい」

リサを押し退けて瑠璃花が大雅の注文をとる。瞬きするリサに瑠璃花はパチンとウインクした。

『がんば』

リサは赤面しながらも唇を噛みしめ気合を入れた。

「失礼します！」

勢いよく厨房に入る。

和葉は眉間にしわを寄せた。

「もつと静かに入れよ。つていうかまた来てんのオーチャンと大食い魔神。毎日来る気か？」

「お兄ちゃんは柚樹先輩に連られて来てるんでしょ？ けど…あ、玲生さんもいらっしゃいましたよ」

「まあ、あの見るからにお坊っちゃん風の健気なストーカー君は置いてないといで。お前のオーチャンは…」

ほらほら、とナイフを持っていない左手を大きく振り、リサに向かつて軽く口角を上げた。

「あー…女田当てーー！」

「そうー！」

「…でも誰？」

「そりゃーお前…」

「え、知ってるんですかーー？」

(Hスパーーー?)

和葉は器用にイチゴを切る手を止めた。

「そりゃ、お前」

「…え」

「おまえ～？」

リサははなつと思い出したような顔をした。

「だつ、大丈夫です。私誰にも言いませんから！」

(私、信用ない！?)

リサは、「おまえなんかに言えるかよ～？」と言われていると思つていた。

全力で否定する。

「言じふらしたりしません！」

「…………あほつ」

はあ、と不機嫌な様子でリサから顔を逸らした和葉は本気でイラ～としていた。

(なに「ノノノ。本当に女子高生?」)

せっかく教えてあげようかと思つたのに。

と、ショーケースに補充しに行こうと厨房から出ると、翔馬のキツイ眼光とぶつかつた。

「あー…。リサちゃん、ちょっとオープン見ててくれる？？？」

「いいんですけど……？」

怪訝そうなリサを厨房に閉じ込めた和葉は翔馬に軽く会釈した。

「……どうしたんすか？」

「…………」

「……えーっと、お席にケーキお持ちしますので」

席戻つて？

和葉のささやかな願いは普通に無視された。

奥の個室からは（食べ過ぎる大雅用の特別部屋）瑠璃花の楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

大方、大雅と玲生と談笑しているのだろう。

「あつちは、楽しそうですよ～？」

ここまではつきり睨まれては、愛想笑いしか和葉に出来る手段はない。

ビクン、と田を泳がした和葉に翔馬は突然一ヶ口リ笑った。

その笑顔に悪寒を感じた和葉はビクッと後ずさつた。

「いつも妹がお世話になつてます。リサの兄です」

「ああ、いえいえ～」

「これからもどうかよろしく」

「いっ、いえいえ」

(あれ？俺のが5才上…だよな…)

まあ、いつか？

「あ、お兄さん」

「翔馬です」

「……翔馬君。ケーキ食つ？出来立てなんすけど」

和葉はアップルパイを指差した。

「や、僕甘いものは」

「あ、そ？リサちゃんがこの林檎切つたんだけど、残念」

「…じゃー、頂っこかなー？」

ウキウキとした翔馬に、厨房から出でてきたリサが嬉しそうな声を出した。

「あ、食べてくれるの？お兄ちゃん！和葉さん特製アップルパイは絶品だよ」

そのアップルパイの味を想像したのかリサはほわあと笑う。

「絶対美味しいよー。…あ！私が席に運んでおくね」

楽しそうにケーキをお盆に乗せて運ぶリサを見て、和葉は関心した。

(…本気で天然ちゃんなんだな……。罪な娘)

チラッと翔馬を見ると、ニッコリ微笑まれたので、和葉もニコーシと微笑んでおいた。

んむしゃむしゃむしゃむしゃ。

「…………柚樹」

むしゃ？むしゃむしゃ。

「…………大雅！」

歩きながら食べていたシュークリームを大雅からもぎ取る。
大雅はむすつと翔馬を見た。

「なにすんだよ」

「ひ……親友がこんなに傷心してんだからちよつとは真面目に聽け
！」

「聞いてた。妹ちゃんが心配だーって」

「……そうだよ？」

翔馬はガーンと暗い顔でふふふと笑った。

大雅はそういうえ、と翔馬の頭を見る。

「……治つたな、怪我」

パンツになつたりサに殴られた痕はもう、少し見ただけでは分からぬほど消えていた。

「あー…。リサが毎日消毒してくれたからな」

そう、自分の誤解だつたと思い込んだりサは毎日献身的に治療をしてくれた。

思わず頬がゆるむ。

大雅は、翔馬をつづく面白い奴だと思つ。こんな口々口々表情を替えて疲れないのだろうか。

そんな事を思う大雅に構わず翔馬は語り始めた。

「第一何なんだあの制服！どつかの衣装か！？可愛すぎんだろ！」

「ああ、最初は驚いたけどんじやね？似合つてるし」

「似合いすぎだ！どーすんだよどつかのオタクに好かれたりしたら

！」

「いや……瑠璃花さんが守ってくれると思うが」

翔馬は納得してしまった。あんな美人も初めて見たが、あそこまで男気のある年下も初めて見た。

「な？ 心配ないって」

「いや。……バカだな大雅。何のために毎日毎日店に通つてると？ もちろんあの和葉とかゆーだけに白くて細つそくて…俺と張れるぐらいイケメンのあいつを見張りにいってんだよー。」

大雅はああ、と頷いた。瑠璃花さんも言つていたが、そういうえば妹ちゃんは和葉さんに惚れているとか。

和葉さんは、天才的な口さの菓子を作るので大尊敬の人物だが、こんなのでも一応親友。

大雅は翔馬を可哀想な目で見た。

「…なんだよ」

翔馬の言動全てがもう、妹を心配する“お兄ちゃん”になつているのに本人はそれに気が付いていないというのが不憫すぎる。

「だから何なんだ！」

「いや……別に」

翔馬ははあーと長いため息をついた。

大雅から奪つたシュークリームをぱいつと口の中に放る。

「おまえさー…。唯一無二の親友だろ？もつと俺を敬えよ」

何故に敬意を持たねばならないのか。

だが、大雅は少し親友に憐れみを持ち、ぽつりと呟いた。

「見張る為にカフェ通つてんのだつたら、なんで妹ちゃんと一緒に家帰らないんだ？」

翔馬はポカンと口を開けた。

大雅は淡々と続ける。

「今頃多分、和葉さんと一人つきりでラヴ・ハプニングとか起きてたりして」

翔馬は風のように駆け出した。

一瞬で見えなくなつた親友に大雅は苦笑いを浮かべた。

(だからそれが、愛する妹を守るーとする『お兄ちゃん』なんだけどな)

lovesickness

最後の客（大食い魔神とその仲間たち）も帰り、外を見ると暗くなっていた。

「よーし、店じまいしよかー？」

「うん」

和葉は厨房の片付けにいたので店内は瑠璃花とリサでちやつちやと済ませ、瑠璃花はじゃ、と急いで店を出よつとした。

「お先失礼しますぅー ちよつと急ぐんで」

「やうなんだ… もしかして？」

リサが指差した先にはやつぱり電柱に寄りかかる玲生。瑠璃花は一瞬、と苦い顔をしたが諦めたように玲生の元に駆けていった。

「じゃあな、頑張るんやでー」

「ば…バイバイ」

手を振り、見送ると玲生は瑠璃花に満面の笑みを送っていたが、瑠璃花はふん、と玲生を置いていこうとする。

ショックを受けながらも追いかける玲生の姿があまりに微笑ましくて、リサは一人でクスッと笑った。

「あらー。頑張つてんなあ玲生君」

いつの間にか隣にいた和葉にリサはかなり驚いた。

前から思つていたが、あまり気配を感じさせない人だ。たが決して存在が薄い、という事ではない。

誰とも違う、強烈な個性は、ガンガン伝わってくる。

和葉も帰り支度が終わつたようで、私服になつっていた。

あまり「」ちゃ「」ちゃしてないシンプルな服で、華奢でスタイルのよい和葉によく似合つている。

いつも思うが…かつこよすぎ。

和葉は外をチラツと見て、リサに軽く口角を上げて笑んだ。

「送るか？暗くなつたし」

「え…いいんですか？」

「ま、（オーネチャンに）バレなかつたら大丈夫」

「え？」

「多分俺ん家と方向一緒だしね」

あの公園で泣いてたもんなー？と意地悪く笑う和葉をリサは赤面しながら軽く睨んだ。

道を歩きながら、和葉は思い出したようにリサを見た。

「あー。… 明日バイト来れる? 日曜なのに悪いんだけど」

「あ… 大丈夫です。日曜もやつぱり開店してゐるんですね」

琴莉に日曜は休みだと言っていたのをリサは思い出した。
和葉はうーんと微妙な顔で呟いた。

「基本、バイトの学生さんは休みにしてるんだ。店長の方針は。
でも明日はちがうこと思つからねー」

「? なにがあるんですか?」

「いやまあ、それは…… 秘密だけぞ」

「… 気になるじゃないですか」

「気にしどこで」

おどける和葉に、リサはふふ、と笑んだ。
和葉はそんなリサの顔を不思議そうに見た。

「なんか、最初の印象と違つた」

「え、やつですか?」

きょとんと見上げてくる少女は、最初あの公園で会ったときの
不幸の底、といった雰囲気がまるでない。
別人かと思うほど。

「… なあ、なんで泣いてたのー?」

かなり気になるが、追求するのはこれで最後にしてよつと決めて、和葉は訊ねた。

リサは、ああ、と恥ずかしそうに笑った。

「私の勘違いといつか。…お兄ちゃんに。…キスされて、パニックになっちゃって」

「えー。……」

和葉は息をのんだ。
なんとか言葉をだす。

「……でもさ、それってー」

「リサ」

パタッと足を止めた二人の行く手に息を切らした翔馬がいた。

「お、お兄ちゃん?」

「……勘違いなんかじゃねーよ。バカだな」

つかつかと威圧感のある足取りでリサに近づいた翔馬は、隣で固まる和葉には目もくれずに無理矢理リサの唇を塞いだ。

「つ……やめ、て」

俯くようにして翔馬から逃れようとするリサを翔馬は切なげな瞳で

見詰めた。

「リサ、俺は……」

「…………」

和葉は翔馬から口を守るよひに間に立つた。

「……止めるよ。嫌がってる」

小刻みに震えるリサの体温を背中に感じながら和葉は言った。

翔馬はゆっくりため息を付いて、ふんわりと微笑んだ。だが少し、口元がひきつっている。

「『』めんリサ、帰りつつ？」

（ふざけんなよ……）

和葉は自分でもわからない怒りに似た気持ちをふつふつと感じていた。

翔馬は、なおも笑う。

「俺は、リサのことが好きだよ。……でも、わかつた。リサが俺の事を好きになるまで、俺、待つから。だから……」

「ふざけんな」

翔馬は、一瞬瞳を光らせたが、すぐにため息を付いた。

「あんたには関係ない。……ほり、リサ！ひらおこで。帰れ！」

甘く優しい声。

王子様のような笑顔。

でも……。

「や……」

小さな、今にも消えてしまったやつな感覚。けれど和葉には、はっきり聞こえた。

思わず口元がゆるんだ和葉は背中にしがみついていたリサの頭をポンポンと軽く叩いた。

「じゃ、うづくるか？」

……え？

と、驚いて丸い目を向けるリサに一ヶと笑いかける。

「ど？」

「……いいの？」

翔馬の息をのむ音が聞こえた。
和葉は翔馬を静かに見た。

「いいすよね？……翔馬君」

「……ひ

顔を赤らめて歯を食い縛った翔馬は、ぐるりと背を向けた。

茶色の柔らかな髪が遠ざかるのを、リサはまづつと見ていた。

氣になっていたよ。

どこか、俺やあいつに似た、リサの事は。

公園で泣いているリサを見たとき、
あまりの可愛さに思わず隣に座つていた。

いつ、泣き止むのかな、そう思いながらぼうっとしていると、泣き
終わった彼女は俺に気が付いて恥ずかしそうに顔を赤らめ、空を見
上げた。

そんな彼女に、俺は他人行儀な心配しか出来なかつた。

「……家、帰れよ?」

言つてしまつてから後悔した。

家に居たくない理由があつて、こんなところで泣いているのだひつ。

はあ、俺つて馬鹿。。

寂しそうな目をしたリサは柔らかな笑顔を俺に向けてくれた。

「……はい

小さく、精一杯の明るさを含んだその声から、俺への落胆は、よく
伝わってきたよ。

急ぎ足でマンションに帰りながら。

また俺はひとつ。

自分を嫌いになつたんだ。

そんな俺が、彼女と再会出来たのは神の悪戯か。

翔太に連れられてリサがいる部屋の戸を開けて。

俺がどれだけ驚いたことか……。

でも、やはり気になつたのは、あの夜。
どうして泣いていたの？

「やつぱり。なんで？」

最初に、平静を装つて訊いても、スルッとほぐらかせて。
ミーハのほうに興味いつてたし。

まず俺の質問に答えるよー

おかげで嘘まで付いてしまつた。

でも、あの日のように暗くもないし、嘘笑いをすることもなく、いつも楽しそうに働くリサはとても可愛くて。

……それが少し、心配だったが。

そんな時、リサのオーチャンに初めて会つた。

後からリサに本当の兄妹ではないと聞いて、俺を睨む田と、リサを

切なげにみつめる田への説明はいった。

俺は自分でもよくわからな「くら」い面倒くさこ性格で、一時は[冗談]のよつに翔馬を応援しようつかと思つていた。

「私の勘違いといつか。…お兄ちゃん」「…キスされて、パニックになっちゃつて」

本氣で勘違い、と思つていろよつな困つたよつな表情のリサに、俺は息をのんだ。

「でも、それつてー…」

なにを言おうとしたのか、俺にもわからない。

ただ、思わず口から飛び出しあきた。

正直、俺は本氣でリサの事を好きなのか…、わからない。

だつてリサも、到底俺の事を好きだとは言えないだろ??

リサさん、からつサちゃん、に呼び方が変わつたのも、多分気付いてくれてない。

瑠璃花に、さんは他人行儀だとダメ出しされて、変えてみたが。

……どいつも、「○v○vのよつ」のよつな氣がする。

それこそ妹のよつな。

それで、どこか軽く見ていたのかも知れない。だが……こんな事態を引き起こすなんて。

荒々しくコサに口付ける翔馬を、俺は止められなかった。

「だけど。一瞬、苦しそうに俺を見たリサに、やっと決心がついたんだ。」

「……止めるよ。嫌がってる」

ナニツ、ヒ。

俺に震れるよつにして震えるコサをーーー。

lovesickness

「入つて? テキトーに座つといでね」

有明、と表札に書かれた白いドアの部屋に入る。

(わ、和葉さんの薰り……)

バニラの薰りと、少し煙草の匂いが混ざつて。

和葉はバタバタと部屋の窓を開けていた。

「「」めんなー? 寒い?」

「いえー…。大丈夫です。……あれ? ミーハーじゃない」

和葉はああ、と頭をかいた。

「あいつ、拉致してきたんだよ。隣の奴から」

「ら、拉致?」

うん。と和葉は頷いた。

「隣の奴……ちょっと知り合いなんだけど、そいつが飼つてて。時々貸してもうつてんの。……あ。前、俺思わず俺の猫~とか嘘ついたんだよな。ごめんね?」

「ふふ……はい」

「あ。麦茶でい？後は酒しかないんだ」

「くべつと額を、その部屋に唯一置かれていた黒いソファに座る。和葉も、少し距離をあけてリサの隣に座った。

「…………」

「…………あの」

「いいから。今は、無理して喋らないで」

「…………はー」

「俺ちゅうと、煙草吸つてきていい？」

「あ、はー。…………え、あ、ちゅうと」

立ち上がった和葉のシャツを掴む。

「や、外には……行かないで欲しいんですけど……」

言つて、自分の顔が赤くなるのを感じる。

「…………今まで子供なんだわ。…………私。

ビュウ～と窓から冷たい風が入ってきた。

(あ、そつか……)

煙草の匂い消すために窓全部……。

和葉は寒そうに眉間にしわを寄せた。

「… よりしゃわかつた」

「え? ……ええ! ?」

窓を全部閉めた後、和葉はベランダに出た。

「ほり、俺いるでしょ」

まあ、ガラス越しに姿は見えますが。
そして窓も閉まつて私は寒くないです。

とは言ひとも「ひまマンシ四〇の一六階。

……寒いでしょう! ?

慌てて追いかけようとしたリサを和葉は軽く睨んだ。

「だーめ。副流煙危ないから。待つて」

「…………はあい」

しぶしぶソファに戻るうとしたリサに和葉は思い出したように声を
かけた。

「…………はらへったなー。……なんか、作って

リサはクルッと嬉しそうに振り向いた。

「キッチャン、お借りしまーねー。」

キッチャンは、やはり綺麗に片付いていた。
ちょうど冷蔵庫に食材が揃っていたのでハンバーグを作り、材料を切る。

(……私、何しに?)

お兄ちゃんに……。

でも……そんな事より私。

また、お兄ちゃんを、傷つけた……。

涙は出なかつた。

混乱してこるので、その事を考えたくない、多分、私、無意識に忘れようとしている。

前だつてー…。

(私、気づいてた…?)

お兄ちゃんが、私の事、……好き、だつて。

切なそうな、あの瞳を見たのは、今日が初めてじゃ、ない。

でも、考えたくなくて。
だつて、私はー…。

「あ、こいつ、油使うんなひエプロン着るー……ほり」

手が汚れている私に、和葉さんはエプロンを広げて着させてくれた。

「あ、ごめんなさい…」

「……いよ……じゃ、俺待つとくか」

そうこうで、和葉さんはまた煙草を持つてベランダに戻った。

だめ。

やつぱり、ダメだよお兄ちゃん……。

私…、和葉さんが好き。

華奢で、透き通るようないい肌。

あの黒い髪に、触りたい。

いつも不敵な笑みを浮かべて、人を自分のペースに乗っけちゃって。何でも器用にこなしてしまう人。

でも、時々、ふと遠くを見るような目をして。

その目を見るたびに、胸が締め付けられる。

……そのブレスレットのひと、ですか？

私じゃ、ダメですか…？

「すげー、マジで皿かつた

「本当ですか?……あ、でも和葉さん、もつと上手に作れやつ」

和葉は一ヶと笑った。

「今度作ってやろかね」

「…はい。勉強させて頂きます」

「ははっ。嘘だつて。皿によ、本当に。すいこな。最近の女子高生は米も研げないのが普通かと思つてた」

「いや、まあかー」

「…それがな? 実在すんだよ」

リサは瞬きした。

「え、だれですか?」

「琴莉。あいつ米を洗剤で洗いやがつた」

「あー…。しそう…え、店で?」

「うん。可哀想だつたな剛さん。せつかく買った新品の炊飯器壊されて。……ま、俺が止めれば良かつたんだろうけどね」

「やつですよね…。……」

急に、リサの顔が前の公園で見た顔になつた。

……はあ。

「……」めん、あの話だけど、リサちやん。君は、じつしたい？
知っていたでしょ、本当は、翔太君が、君の事――

「言わないで……」

リサは青い顔で耳を塞いだ。

「…………」よ。…………リサちやん。君はどうしたい？」

静かな、声。

黙り込むリサに、和葉は頬杖をついた。

リサが話し出すのを、待つ。

時計の音が、ある。

「なんで……」

リサはかすれるよひな声で、和葉に言つた。

「和葉さんは関係ないつ……」

和葉はプツッと自分の中で何かが切れるのを感じた。

「…………関係なくねえよつ――だけんな――」

ビクッとリサの髪が揺れた。

小さく震え始めたリサの顔を両手で挟み、自分に向かせる。

「…………ひとりで、いいのかよ？俺を頼れよ」

リサの涙が、和葉の手に滑る。
それでもリサは、下を向いた。

「……無理……」

「…………なんで」

「だつて……。私……。和葉さんに頼つたら……」

「なに」

無理矢理田線を合わせ、強い口調と視線をリサに向ける。

リサも、ギュッときを引き結んだ。

「…………俺を頼つたらなに」

「…………ます」

「……え、なに？」

「私……好きに、なつむけいますよ……？和葉さんの事……」

「私……好きに、なつむけますよ……？」

思わず、リサの顔をつかんでいた両手からパタンと力が抜けた。

リサの目から、大粒の涙が零れた。

悲しそうな顔をして、ソファから立ち上がりうつしたリサの手を和葉は掴んだ。

「リサ……。待って」

「…………離して下せー」

和葉はため息をついて立ち上がった。

「…………おー」

大雅は窓からよじ登つてくる親友に思いつきり迷惑そつた顔をした。

「…………こいは俺の家で、お前のよじ登つてる窓は俺の部屋のだ」

「つーーーーー！わかつてゐるよーーーー！」

転げ落ちるよつに着地した翔馬は真つ赤に泣き腫らした目をしていた。

そのままベッタッと土下座してくる。

「お……お泊まつせで……下せー……」

「…………」

小動物のような瞳を向けてくる。

大雅は、反論を諦めた。

「…………で？ 今度は何をしたんだ？」

ウキウキと自分の布団を敷き始めた翔馬は恥ずかしそうに笑った。

「決め付けるなよ～」

「馬鹿。理由なく来たんなら口を出すぞ！」

「…………まあ、お前に相談しにきたつていうのが7割くらいあるから
な……。…………あのな、大雅……」

「…………なんだ」

「腹減つたよ～」

大雅は枕を投げつけた。

思えば、何故あの時リサを抱き締めたのか…。

俺は、微笑むことさえ、出来なかつたの…。

腕の中にこなにこなに震えていた。

俺は、何にも言えなかつた。

「…じゃない」とか思つておきながら、この胸の痛みを理解して肯定してもいいのか、俺は迷つていた。

だけど…この暖かさを逃してしまつのは、あまりにも惜しくて。

またため息をついた俺を、リサはぐいっと押し返した。

顔を見るとまた、ポロポロ涙をこぼしている。

悲しい、少し怒ったような表情の彼女を、綺麗だなあと不謹慎にも思つてしまつ。

「もう、いいです。自分勝手なことばかりして、『めんなれ』」

勝手な事ばかりしてるのは俺のほうなはずなのに、リサは謝つて、出ていこうとした。

玄関まで行かれて、やつと俺は声が出た。

「リサ……。待つて

「…………」

振り返らず、ただ動きを止めただけのリサに、これが最後だと、漠然と俺は感じた。

「…………ごめん。俺は、今まで女人をちゃんと愛した事が無いんだ……。恋も、したことないと思つ。……そんな俺を、選んでいいのか？……俺は、リサの事を、好きになれないかも知れないのに」

リサを可愛いな、とは何度も思った。

でもそれが、ミーハー可愛いな、とかこのケーキのデザイン可愛いな、とかと違うかと言われたら……正直悩んでしまう。

10代の頃のよつよ遊びで付き合つのなら、こんな事はいちいち考えなかつたけど、リサをそんな風に傷付けたくは無かつた。

だから……もう二つそのことつって欲しい。

俺は、本当に嫌な奴なんだよ？

なのにー…。

君はまだ泣いている。

そして俺に微笑んだんだ。

「…………私は、和葉さんが好きです。好きになつてくれなくて、いいからー…。好きで、いさせて下さー…」

「……本当に、いいの？」

傷付けたく……無いのに。

俺は、リサを傷付けないという自信が……無いよ。

「なあ……俺つて最低な男なのかな……？」

大雅は隣の布団に寝転ぶ翔馬にしつかりと頷いた。

「確實」

「…………わかつてるよ」

大雅の視線を感じながら、翔馬は淡々と続けた。

「だけど……今まで俺がずっと好きだったのに、あんな男にリサを奪われると思つたら……」

自分を、止められなかつた。

暗い瞳の翔馬に大雅はため息をついた。

「お前……成績はいいのにな。どーして肝心なところでバカなんだよ。

俺はそういうの、嫌いじゃないけど

「…………」

「突っ走れよ。お前が迷つてどうすんだ。好きなんだろ？奪われる前に奪えばいい」

「……でも、俺はー……“お兄ちゃん”なんだよ。リサことって」

「こつは…。

真面目な顔して、マジでバカだな。

「…くだんね。俺寝るわ」

「ちよつ……。いいのかな…？俺、欲張つても」

大雅は眠そうな顔で片目だけ開けて、翔馬を睨んだ。

「お前は、どうしたいんだよ。“翔馬”。欲しいんだろ？手に入れうよ。じゃなかつたらスッパリ諦めて、応援しろ。和葉さんとの恋」

「……いやだ」

「…………で？」

「……欲張る」

大雅は初めて口元をゆるめた。

「がんばれよ」

キツクアマイ、香水の薰り。

『カズハ……』

……やめる。言つな、言つなよ。

お願いだからー…。

その女は、出会った頃の素直で無邪気な笑顔を、完全に脱ぎ捨てていた。

切なそうな、色香を含んだ表情で、俺を見る。

なんで、お前なんだよ……。

なんで、お前は……。

俺たちの前に、現れたの？

ジリリリリリ……！

田覚ましの音がした。

パタパタと焦つたような足音も聞こえた。

けど……俺は自分の息を整えるのに精一杯で、目覚ましを消すことを
え、出来なかつた。

夢一〇

もぐりこんだ布団の隙間から、なにやら田舎ましを手に持つて悩んでこるリサの姿が見えた。

ジリリリリ... !

リサは悩んでいた。

消したいけど、この畢竟出し時計はまだ役目を終えていない。

・和葉さんか 起きてこなし

۱۰۷

浪士の死

「んと首を傾けている間にも、時計は辛抱強く鳴り続け……。

和葉さんに微動だにしない

リサは思ひもこた行動に出ぬにじみ出した

田舎者を持つたまは、ベジエで墨の和葉に近づく。

ジリリリリ...!!

「……わーかつた。…………それ消して……？」

「あ、はい」

チンッ。

あっけなく静けさを取り戻した部屋で、和葉はむりくつと起き上がり

つた。

「…………おはよ」

じっと田を見られて、思わずリサは赤面した。

「おはようございます……」

「…………眠れた?」めんねソファーで

「あ、いえ。すごい熟睡できました」

……そーでしょーね。

和葉は寝不足の田をこすった。

夜、ドサッと重い音がしたからなにかと想つてリサが寝てこるコンビ
ングに行くと、案の定。

ソファから転げ落ちてなお冷たいフローリングですやすやす跳るリサ。

それから二回はソファにリサを戻す作業をした。

全べ。俺は保育士なんだじゃないからー。
いつ理性が飛んでくか、ヒヤヒヤもんだつたんだからねー！

あんたこへつよーー？

おかげで浅い眠りについて、嫌な過去まで思い出してしまった。

「和葉さん……？」

ボーッとしていた俺をリサが心配そうに見詰めた。
ぶかぶかな俺のシャツ着て……。

可愛いくすぐただよ、もひつー！

「あー、」めん、「めん。…………あーー今何時ーー？」

「えーー？…………6時1~2分です」

和葉はガバッとベッドから降り、慌ててキッキンに走った。

「……やつべーー…………あーでも軽めで……」

手伝おうとまだ寝ぼけた顔でトロトロ歩くコサに和葉はギッと強い
視線を向けた。

「こーから。あとー5分で家出るからね

「はー、はーはー」「

とつあえず洗面所で急いで歯と顔を洗い、昨日着ていた服を着る。

わやつわやと髪を整える。

「着替えた？」

「あ、どうだい？」

「うめんねえ。……あ」

歯を磨き終わった和葉はやばい、と口を動かした。

リサに向むかって田線を含ます。

「…五円蠅いヤツがく…」

『かーずは あーけーるーよー』

ドントンとドアを叩く音がある。

「無視していいからね」

「いや、そんなワケには

『和葉ー？あけろよー』

「つたへ…（怒）」

すたすたと玄関のドアに近づいた和葉は鍵をガチャンと開けた。

「…………今日またひょっと雪つてくれ……」

「おひさまよーーなんだよーほひ。愛しの//ー ハ連れてきてやったの
ハ」

ハーパー…。

あまりに弓麿らしさに豊を唄い、ソササギよこつと顔を出しちしまつた。

「あつーー！ハニカ」

「え、可愛い なに誰 Bieber 関係ー？」

「…………わかった。もう家入つていいから。静かにしてくれ……」

ハーハを抱いた和葉は力尽きたように肩を落とした。

「なんだー。家絵貴のバイトちゃんねー？あそこは美人ばっかだからなー」

やつまつて笑いながらソサの右隣を歩くお隣さん。

(足ながらーー……)

和葉も華奢で綺麗なプロポーションをしているが、加えての高い身長のお隣さんはモテルみたい。

「やうならそつと早く言えぱいにの。俺、まさか和葉にやつと彼女が出来たのかと……」

「井上。五月蠅い」

少し切れ長の目でジトツと井上をじらんだ和葉に、リサは頭を傾けた。

「井上…さん？」

「ああ俺、本名は井上正宗ホシノマサムネつていいます 和葉とは高校からのダチ柔らかく清々しい笑みでリサに握手を求めて伸ばした右手を和葉が無言で払い落とした。

和葉が正宗の隣になるように、リサを自分の左側におく。

繋がれた手から体温が伝わって、リサはかあっと顔が赤くなるのを感じた。

そんなリサをチラッと見た正宗は不満そつな声をもらした。

「過保護ーっ」

「ぬせえ。ホストに氣一許せるかよ

「……ホスト？」

どこか感動した様子で見てくるリサに正宗は苦笑いを浮かべた。

「仕事つていうか…。趣味？平日の19時～23時までしかやってないもん」

「趣味ですか」

冷たい和葉の声に正宗はむつと頬を膨らませた。

「なんだよ。お前だつてしてたじやん。半年だけだつたけどーー」

驚くリサに田中も合わず、苛立つた様子で呟いた。

「マジ?」

不機嫌な和葉に気が付かない正宗に、リサは慌てて訊ねた。

「え、じゃあお仕事つて…？」

正宗は得意気に胸をはつた。

「ペッシュショップの店員ーー店にリサと一緒に連れてけぬし、俺にぴつたりやない？」

和葉はくつと少し強くリサの手をひいた。

「…んじゃ、正宗またな」

正宗は呆れたように微笑んだ。

「んー。バイバイ」

「行くよ」

すたすた歩く和葉を追いかけながらリサは少し焦ったようにならねた。

「かつ……和葉さん…」

「ん」

「わつわお出じや……ないですよね?」

「ああ……騙すような事して本当に悪いと思つてゐるんだけど、ちょ
つと黙つてついてきてくれる?」

リサは明らかに困惑している。

だけど俺は寝不足と井上で少し不機嫌な事もあって、何も説明しないでその噴水前についた。

「…待ち合わせしてるんだ」

「はあ……」

すると、前の駅のほうでなぜら人々がざわめいている。

(?芸能人さんでも見付かったのかな?)

と、そのまま背の低い少女がリサたちに向かって小走りで近づいてきた。

「…えつ、瑠璃花ちゃん…？」

吃驚して口をふさごだりサに、瑠璃花は気まずそうに微笑んだ。

「（）めんな待つた～？電車がちょっと遅れてー。……ってどーしたん和葉さん」

瑠璃花は珍獸でも見るよつた目付き首を傾げた。

「聞いたで。昨日リサを家に泊まらせたんやつ？」

「ああ……つていうか誰に聞いたの」

「大雅さん。……それでなんでそんな機嫌悪いんですね？」

和葉は一ヶ口リ笑つた。

「別に～？それより早くリサを着替えさせて来て？俺、先に行つてるから」

瑠璃花は納得いかない顔でため息をついた。

「了解。1時にそつち着けばいいんだ？ほらリサ行くで」

「えつ…と」

腕をくまれて半ば瑠璃花に連行されているよつたリサに和葉は軽く手を振つた。

「じゃ、また

「は……はー」

リサは不安そうな表情を浮かべながらも少し微笑んで和葉に手を振った。

「はあー！？なんやそれ。え、ありえへんやろ和葉さん。」んな可愛いいー娘にそこまで言わせといて。『…俺は、リサの事を、好きになれないかも知れないのに』て

リサは心の中で和葉に謝った。

でも、なんか楽しいな。

「でもなー…私もちょっと心配。本当にええの？」

黙つて微笑むリサ。

(…。お互に、一筋縄ではいかん相手やからなあー大変そつなんやけど)

「……まあ、応援するけどや」

「うん……。それに…フラれたわけじゃないから、本当は私嬉しいの」

「和葉さんには勿体ないなあ……あ、これしよ

瑠璃花は落ち着いた茶色のワンピースを手にとった。
レースのリボンが可愛く使ってあり柔らかい印象で、絶対リサに似合ひ。

リサも気になつたようで少し身を乗り出した。

瑠璃花はさつきから視線を感じる店員の方を振り向いた。

「すいませーん、これ試着していいですか？」

かなりレベルの高い美少女一人組を少し遠巻きにマークしていたシップ店員は満面の笑顔で近づいてきた。

「はあ——こ、うるさい——」

「じゃ、リサ行っておいで

「え、私が着るの？」

うん。と瑠璃花が頷き、リサは戸惑いぎみに試着室に向かった。

靴とアクセサリーも選び、さつきの店員に言づける。

「これも、あの娘にお願いでもします?」

「はいはーい、お任せ下さい」

ボス、と近くにあつた椅子に座り、携帯をいじる。

数秒で、電話がかかつてきたり。

「もしもし？」

『綾瀬ですけど……。リサは?』

「ん？ いま試着室」

『……は？ なにそれ』

「今さ、ちょっと突然気になつたんやけど、大丈夫やんな？」両親。
心配させとらん？」

『……リサが、それ心配してたの？』

瑠璃花は無意識レベルで顔がひきつるのを感じた。
こいつ……リサしか言えんのかい。

「いや、ちやうけど。大丈夫なんでしょう？」

『ああ…………。昨日から明日の午後まで小旅行に行つてる』

(…大丈夫、では無いことかい)

なんかチクる気満々、みたいに聞こえて瑠璃花は眉をひそめた。

それに気が付いたのかは知らないが、翔馬は少しため息をついた。

『…………勘違いすんなよ？ 僕は卑怯なコトしないから。安心して』

「ふーん…と。タイムオーバー。ごめんなさい、また」

ピッと手早く電話を切り、カーテンから顔を覗かせたリサのところへ行つた。

「あ、やっぱ可愛いー。それにしょ。靴もぴったりやつた？」

「うふ……でも、なんで？……あーちょっと待つて、お会計私する
ー。」

瑠璃花はニヤッと笑つて店員にカードを差し出した。

「えーよ 後から和葉さんに貰つてもええし。あ、カードで」

和葉はキュッとHプロンを結んだ。

(……むじ)

葡萄、梨、栗……。

綺麗に盛られた果実。

新鮮な卵、最高級の小麦粉、砂糖。

和葉はぼそりと呟いた。

「いーじゃん」

他のパーティシェが一心不乱に手を動かす中、和葉はんーと背伸びをした。

ブルブルと携帯を握りしめたまま震える翔馬を可哀想に見詰めた後、大雅は自分の携帯で手早くメールを打った。

『こんちわ 翔馬は俺が見とくから心配しないでいいよ。駅前のホテルにもちゃんと連れてく』

少し待つと、携帯が震えた。

『よろしくー（ぶへー。）』

パタンと携帯を閉じ、まだ落ち込んでいる翔馬の腕をグイッと引いた。

「ほり、行くぞ。今日は行きたい所があんだよ。付き合え
「……えー…。どいいなんだよー」

大雅は鏡の前で帽子を直し、あっけらかんと言った。

「散歩。ま、いーからついてこい

宿と朝ご飯の恩義がある翔馬はしぶしぶながら靴をはいた。

lovesickness12

「お密さん来ないねえ~」

「ニーハイ」

「お腹へつた?..」

「ニーハイ」

「はいはいちょっと待つててね~」

ついでに他の動物にも餌をあげようと店に出た正宗はその“密”にあんぐりアゴを落とした。

次いで警戒の眼差しを浮かべながらも微笑んで会釈する。

「…お久しぶりー。…彩乃サン?」

正宗より3歳年上の彩乃是やんわりと妖艶な笑みを正宗に向けた。

青い顔をして立ちつくす正宗をからかうようにクスクス笑う。

「まさかペットショップで働いてるなんて。驚いたわ?」

「……元々、夢だつたんでね。…何しに来たの一?」

「…カズハ、ビヒ~」

急に真剣な眼差しをした彩乃に正宗も真顔に戻った。

「俺が教えると思う? あいつだって会いたくないと思うよ? 彩乃サン、あいつにサイマーな事したんだから。自覚あんの?」

彩乃是微笑んで踵を返した。

「じゃあね。邪魔したわ」

「……あいつにもう関わるなよ。やつと幸せにー…」

正宗は失言に気付き口を閉ざしたが、それがもっと不自然になってしまった。

彩乃是見るからに苛ついた様子で歌うように呟いた。

「ふーん???? 彼女でも出来たの?」

「……そうだよ。彩乃サンなんか出る幕ないくらい可愛い娘だよ。…マジで帰つて。俺らの前にもう姿を見せないでよ」

正宗は自分に嫌気がさしながら喋つた。

ホストなんかやつてるくせに、親友を守る嘘さえつけない。しかも、火を付けてしまったかも知れない…。

バツカじゃねえの俺…。

彩乃是楽しそうにため息をついて手を振り、店を出ていった。

「おーい……大雅ー?。どに行くんだよ。どうしてそんな無計画で
すんどこ歩けるんだお前は。そんでなぜ着替えなんだよ」

翔馬も、普通にきちんとした服になっていた。
大雅は家を出たときから襟つきを着ている。

「はいはい。ほら、着いた」

翔馬は首を傾げた。

「…百田鬼第三ホテル? なに、なんで?」

伝統もある高級ホテルだ。
ここに入るのなら、そりやあ服に気をつかわないといけないが。

「今日、ここにリサちゃんが来る。瑠璃花ちゃんと一緒に」

「…………は」

すたすた歩く大雅の後をしぶしぶ付いていた翔馬はピタッと歩を止めた。

面倒くせうつに翔馬のほうを振り返った大雅はなだめるような目を
向けた。

「来いよ。その方がお前の為だ。諦めるか奪いかえすか。今日ここ
で決める」

やつぱ奪われてんのかよ……。

「……勝手なこというなよ」

大雅は翔馬の腕をつかんでホテルの入口をぐぐつた。

「いらっしゃいませ」

「もうしじうがねーだろ。はらぐくれ」

「…………ど、行くんだ?」

ああ、と大雅は思い出したように呟いた。

「コレ

大きなチラシを見る。

読んで、翔馬は啞然とした。

「…『秋のスイーツ新作コレクション』……?」

大雅たちが着く少し前に到着したリサたちは、ホテル内にあるカフェにいた。

瑠璃花から笑みと一緒に渡された一枚の小さなチラシに目が点になる。

そしてそのパーティシエの名前が載せられた一角に、小さく有明和葉といづる。

「…ま、今回のは若手の力試しみたいな感じ? それぞれのパーティシエが働いてる店の名前も載るしけつこう有名なパーティだから、各パーティシエの今後の評価にもつながるんよね」

大きなパーティー会場で、各パーティシエが精魂込めて作ったスイーツが、製作者の名と一緒に置かれ、その筋の専門家や雑誌などの関係者たちが試食し評価する。

良い評価を貰えれば一躍有名パーティシエになれるが、悪い評価だと家絵貴の格まで落ちる。

瑠璃花のかいつまんだ説明でも、すごく重要で大切なパーティーだとリサでも分かる。

「そ、それは……邪魔するわけには」

「でも、和葉さんの様子、見たいやろ?」

「う……それは、まあ」

瑠璃花はニヤツと笑った。

「邪魔なんかせーへんよ。こつちは招待されてんのやから。ケーキ食べ放題やで」

ほら、と瑠璃花は一枚のハガキを出した。

「え、なんで私も？」

「私、ちょっとijiのホテルの息子と知り合いでな？特別発行。私
とリサ。あと、大雅さんと翔馬さんのも作つてもらつた」

リサは元々大きな目をもつと大きくした。

「お、兄ちゃん、くるの？」

何がどうなつているのか、全く理解出来ない。

瑠璃花は軽く頷いた。

「勝手に話進めて」めんな。でも、早く決着つけたほうがええと思
て」

キュッと唇を噛み締めたりサは少し笑つた。

「ううん……」

「…確認やけど。リサは、和葉さんが好きなんよな？」

リサはむせた。

「げほつ……」

(…なんでなんかなあ。私の友達つて変人を好きになるんやなー…)

リサは顔を赤らめ視線をさまよわせた。

「す……好きよ？」

「……好きになつてもうべるかどうか、わからへんのやうっ。」

「いいの」

「……ホンマ?..」

「……いいの」

微笑むリサは少し大人びて見えた。

瑠璃花は少し、羨ましいなどリサを見詰めた。

瑠璃花も美妃も、誰かにこゝまで…自分が傷付く覚悟で恋したこと
は無いから。

(……私は、傷ついたら一目散に逃げる女やし)

そんな恋の…相手に出会つたりサが羨ましい。
だが同時に、瑠璃花はリサの手をギュッと握っていた。

「え?」

「…辛くなつたら、私がなんとかしたる。頼つてな?」

リサははつと息をのんだ。

頼れ……和葉にも言われた。

だけど……ここで翔馬に逢つと聞いて、誰かに頼りついで……ましてや和葉に頼らうとはー。

(私……また間違えた?)
せつかく、好きになつていいくつて、言つてもいいんだのに。

「…………リサ」

ボロ。ボロ涙を溢すリサの手をさする。

ボーン

壁掛け時計が低く鳴つた。

瑠璃花はリサの頬をハンカチで拭い、ニコニコリサに微笑んで立ち上がつた。

「1回、軽く化粧直してから行こか?」

「うん……」

lovesickness13

秋のスイーツ新作コレクション

- ・開催内容

若いパーティシエの育成。優秀な人材の発掘とする。

- ・開催場所

百日鬼第三ホテル。

- ・参加対象

和洋菓子店・製パン店で製造技術者として勤務しているもの
1事業者1作品とする

- ・参加料

無料

- ・表彰

- (1) グランプリ 1点 賞金30万円・トロフィー
- (2) 特別賞 1点 トロフィー

『……で?』

怒氣を含んだ声色に思わず背筋が凍る。

「で……リサちゃん……」

『『ぱりしたのかよ?』

「「「、「めん…。でも俺」

『あ?』

「すいません…。俺が甘かつた…」

はあ、と和葉はため息をついた。

『これからどうなる事か…。だいたいお前こんな時に電話してきやがって』

「あ…。「めん」

『「…よしうじ休憩時間だったから。でももつ始まるわ。切るな?』

「う、マジで」「めん。……頑張つて」

自分でも、どつちの事を言つて居るのか分からなかつたが、和葉は軽く応えてくれた。

『おひ。じゃあな』

… プツツと電話が切れた後、正宗はズルズルと壁に体重をかけて座り込んだ。

「俺、最悪だ…」

彩乃には最大の警戒心を持っていたのに。

つていうか俺、プライベートと仕事の区別には自信あつたのに。

……せつかく、和葉が立ち直つたのに。

頭を抱える正宗に、携帯がピロリンッと鳴つた。見ると、和葉からのメール。

『気になんなよ！』

「……和葉あ～」

正宗は嬉しくて涙がこぼれた。

作り終えたスイーツが係員によつて会場に運ばれるのを見ながら、和葉は呟いた。

「……バカ」

あまりにも落ち込んでいた正宗に励ましのメールを送つてから、和葉ははあー、と瞑目した。

彩乃か……。

びつして、あの日から一年も経つた今、接触してきたのか……。

今はホストとしてAppyで働いてないとは言つても、俺の居

場所なんかすぐ分かるだろ？、俺ではなく正宗に先に会こに行つて情報を聞き出した意味は…。

(あー、くそっ)

どう転んでも、面倒な事になるのは避けられなさそうだ。

「あー、やー、どうも有明さん」

雑誌の記者が近付いてきたので、営業スマイルで軽く会釈した。

「わあー…」

リサは思わず瑠璃花の腕にキュッとしがみついた。

あまりに広くキラキラとした会場で、お菓子の甘い匂いだけが充满している。いかにも、といった感じの人々がケーキを厳しい目で見たり食べたりしている。

会場の真ん中を深い青色のテーブルクロスが引かれたテーブルがまっすぐにのびていて、その上に品よく間隔をとられてスイーツが美しく飾られていた。パティシエは別室で控えているようだ。

その、右端よりの真ん中に、和葉の作品があった。

見て、瑠璃花はニヤツと笑つた。

「和葉さん？」

「美味しいわ……」

“和栗のモンブラン”多くに仰々しい名前が付けられている中、少し遊び心のある簡素な名前は、他の招待客にもうけているようだつた。

試食用のモンブランが無くなつてしまいそうな勢いだつたので、一つを一人で分けることにした。

瑠璃花とリサは顔を見合させた。

「……美味しいね」

「…店のケーキは本気で作つとらんつちゅー」とか?」

リサも瑠璃花も分かつたが、和葉は本気といつか、家絵貴のスイーツを作る時には、多分剛オーナーの味に合わせているようだ。

決してオーナーの味が和葉に劣つていることは無いのだが、このモンブランは和葉らしさ、が出ていて個性的だった。

土台はパウンドケーキで上にマロンクリームが絞つてあって、頂上の栗甘煮は本当に美味しい。

最も特徴的なのはマロンクリームだつた。

リサはここまで栗!といったモンブランは初めて食べた。

瑠璃花はリサに笑いかけた。

「すいに、和葉さん。来てよかつたやう?」

「うん……あ」

リサはビクッと身を縮ませた。

瑠璃花はリサの目線の先に大雅に引きずられるように歩く翔馬を見つけた。

瑠璃花は大きく手を振った。

「お~い

大雅がそれに気づき、こちらに来た。

「ごめん遅れた。こいつが抵抗しやがって」

「いや大丈夫。じゃ」

リサの手をほどいた瑠璃花は神妙な顔をした翔馬の腕を掴んだ。

「トレード」

「へ?」

瑠璃花は混乱した翔馬を連れてどこかへ消えた。

「……いつたな

「はい……ん? 柚樹先輩」

笑顔のまま固まるリサに、大雅はテーブルを指差した。

「せつかく來たんだし、食お」

「は、はこつ」「

「おこ、ビレーヴんだよ……ひつ」

振り返つた瑠璃花の鬼のような形相に思わず声がもれた。

「なんや、えつらわーやなあ？」のあせんだらあ

「…………」

「あんたあんなピコアガール傷つけといてよくへいまで来れたなあ。
その勇氣には乾杯したらあ」

「…………じつも」

反応の薄い翔馬に舌打ちした瑠璃花はで？と完璧な笑顔を作つた。

「うかうびにするん？答ひつけやあ殺すで」

「おお、物騒だな」

「諦めよ。リサが和葉さんごベタぼれなん、分かるや。あんた
ストーカーみたくないんで」

翔馬は声をたてて笑つた。

「なるほど。現にストーカーされてる奴の面つらとは重みが違うな」

…… IJの性悪男。

「…何が気に入らんの?年?」

「…別に。いいだろ兄貴なんだから。妹の心配したって」

瑠璃花は鼻で笑った。IJたちもつ、リサから血繋がつてない事くらい知ってる。

「兄貴が妹にチューするんか!?.なんなんあんた。兄貴なん?..あーそ'つ、変態認めるんやな」

「…………おせつかいな女」

瑠璃花は無視することにした。大袈裟にため息をつく。

「…………まあ、ええわ。リサは私の家に泊まらす。あんたと一緒にいたないやうし、和葉さんちに置いとくのもどうかと思つて。今日はそれ言つとこ思ひん」

翔馬は本気で驚いたように瑠璃花を見た。

「なに?あ、なんやつたらこのホテルの部屋に泊らせんのも出来るけど」

「…お前、意外といいやつだな」

「あ、？」

「リサのことはお前に任せた。もうじくへな

「…………はあ」

翔馬は少し首を傾げた。

「もう行つても？」

「…………ええけど、あんたは大雅さん係やから

今頃無制限にケーキをがつついでいるのだろうか…………。

翔馬は軽く頷いた。

渋い顔で腕組みをした瑠璃花に翔馬は少し微笑んだ。

「俺、欲張ることに決めたんだ。リサは渡さない」

「……そ。せいぜい頑張り」

翔馬が居なくなるのを確認してから、
瑠璃花は光続ける携帯を開いた。

薄く化粧して、少し大人っぽいワンピースのリサは本気で可愛かった。

ま、俺を見て怯えるのは分かったけど……。

あーあ、俺、こんな後先考えずに動く奴じゃなかつたのになー…。何のために10年も我慢してきたのか…。

超絶美少女に説教されて、思わず生意気な態度をとってしまった（年下に）けど、俺マジ何してんだるーと思つことばかり。

その後慌てて大雅のところに行つてみたけど、食い荒らしてる様子は全く無かつた。

ていうか、雑誌のカメラマンっぽい人に写真とられてたんすけど。

「あ、…お兄ちゃん」

少し離れた所でその様子を珍しげに見ていたリサは俺に気付いて微笑もうとして…固まつた。

居心地悪そうにうつむく。

「…なにが皿かつた？」

「……全部、美味しかつたよ？」

「あ……わうだよな

リサは思ひをもつたよつて俺を見た。

「お兄ちやん

「…………うん

「…………りさ

「…………りさ

俺は身をかがめた。
キスしようとして。
学習能力が無いって？

恋にそんなの、必要ないよ。

あと数センチ、リサが顔を逸らした瞬間……。

「きやーー！カワイー

「おっ、いたぞ！ケーキ君発見！カメラマンー！」

「抱きつかれてる～ いいなあ～」

俺はやつと状況を把握した。

やけにモハモハしたそいつの腕の中で俺はもがいた。

「なつ！はなせえー！」

その…俺より一回り大きなキグルミは沢山の人に囲まれて俺をぽいつとリサと真逆の方向に放り出した。

(あ、あいつ……)

リサに可愛らしい動作でケーキを差し出したそいつは、カメラマンにポーズを決めていた。

俺はアレの中身をほぼ確信の直感で分かつた。

(かつ……和葉！—)

仲良くデジカメと携帯を構える瑠璃花と大雅に、俺はがっくりと俯いた。

(ふう……あつぶねー)

客に手を振りながらキグルミ和葉は瑠璃花に感謝していた。

少し前、瑠璃花に彩乃の事を伝えた。

遅かれ早かれ瑠璃花には分かつてしまつだらうし、彩乃がリサに危害を加える恐れも、無いとは言い切れなかつたから。

詳しい昔話はしていないけど、瑠璃花は賢いから察してくれたようだ。

でもその後……。

「あ、言つたらんかつたけど、今日翔馬くん来とるで」

「…………え？」

「聞いてないよ？」

俺はキレた。

「なんで言わないんだよーっていつか今日、けっこつ俺には大事な日なんだけどー!?」

瑠璃花は苦い顔をした。

「だから言わんかったんやんか……。いーやんもつ。あと30分で結果でるし」

「よかねえよー…………あーもう最っ悪だ」

頼れよ、とか言つたくせに俺ー……。

「あー、あーりーえーなーいー」

頭を抱えてしゃがみこんだ俺に、瑠璃花は思い付いたよつて舌を鳴らした。

(そんで今、ケーキ君でえすうー)

今回の「コレクション」の主催である菓子会社のイメージキャラクター、
ケーキ君

ぽかんと可愛い顔をしているリサにやれやれとアメリカ人ぽくリア
クションしてみる。

(だーれの為にこんなことしてんなのよ)

あーあ。

俺は自分に訊いた。

(俺って、リサのことが好きなのかな?)

正直わかんない。

でも、そんな俺でも好きだって言つてくれるなんらー…。

俺、もう少しそばにいてもいいよね?

「お？なんかモンブランが無いんだけど」

オーナーショフの剛がショーケースを見て首を傾げた。
顔を見合わせた瑠璃花とリサが口を開く前に、のつそりと和葉が厨
房から出てきた。

暗い声でボソッと呟く。

「剛さん……俺はもうダメです」

「は？」

「モンブランはもう……当分作れない……」

「…なにがあつたんだ和葉…」

事情を知らない剛にリサは囁いた。

「一位だつたんですね…」

「え、なにが？」

「IJの前の、秋のスイーツコレクション……モンブランで」

剛は田を見開いた。

「つむー？誰、一番」

瑠璃花はぴりりとチラシを剛に渡した。

「……吉良スイーツの……佐藤君？聞いたこと無いけど

「つい最近まで留学してたんやで」

「だからってそんなに落ち込まないでも……一位だつて僅差なんだろう？」

和葉はふつゝと息をはいた。

「ちよっとそこ」の…作品評価してる文見て下さー

「ん？…アップルパイか…」《とにかく素朴な味に驚いた。『じゅうぱく』} ちゃした感じを一切感じさせない見た目と、素材の味を最大限に引き出した甘さ。聞けば砂糖は最低限とか。昔ながらでかつ、その作品には新しささえ感じさせる。トップに輝くのにどの作品より相応しい》……なんだ、あんまり詳しく書いてないな」

言いつつ、剛は徐々に顔をこわばらせた。

「モンブラン…まさか」

リサはそっと呟いた。

「和葉さんが狙つてたのと同じですよね…」

この評価がそのまま和葉の作品に向けられるはずだったのだが……。

和葉はがっくりと力ぬきた。

休憩時間、リサはどうか哀愁漂つ背中で麦茶を飲む和葉に恐る恐る声をかけた。

「あの……大丈夫ですか……？」

「うん」

絶対嘘だ。としょんぼりするリサを和葉は面白そりに見た。

「なんでしょんぼりしてんの？」

「いえ……なんと無く」

「なんだよそれ」

薄く笑つ和葉の背中に、リサはぽすんと額を押し付けた。

「……。なにやつてんの？」

「うふふ

「……。ひっやつ」

ぐるりと素早く振り向いた和葉はバランスを崩したリサを軽く抱き締めた。

少しの沈黙の後、和葉はあーと重いため息をはいた。

「ヒジゅーまん、欲しかつたなー……」

「お金ですか…（笑）

「んー、ま、良いけど」

「シコリ微笑んだ和葉にリサは小首を傾げた。

「本当?」

「うん。てゆーか、そんな事で落ち込んでるヒマねーしな。またキスされそうになつてただろ?」

リサは少し後ずさつた。

見られてたの?

「あ…、はあ、まあ…」

「…無防備すぎ。俺の事好きつて言つてるクセに」

「…そりですか?」

リサは本氣で悩んで、俯いた。

黙つて微笑んでいる和葉を、ちらりと見上げる。可愛らしく頬を染め、小さく呟いた。

「よく…わかんないんですよね……」

リサはやつと、急いで店内に戻つていった。

あまりの衝撃発言に固まつていた和葉はやつとのことで驚く。

「…………マジか

やばい。

何がどうヤバいのか分からなが…………。

和葉はただヤバい、と繰り返していた。

無防備すぎ。俺の事好きって言つてるクセに。

笑顔で、吐き捨てる様にそう言われた時、リサは身体中の血が一瞬凍つたように感じた。

「… そうですか？」

「無防備……。 そうなのだろうな、多分。
だけど……、あの日、私は決着を付けに行つたつもりだった。
だから、キスされそうになつた時、顔をそむけて拒否して、その上
でちゃんと伝えよつと思つてた。」

「だけど……、和葉さんは……。」

どんよりしながら閉店した店内をホウキで掃いていると、瑠璃花が思いつきり不機嫌な顔でつづいてきた。

「なんやの。 しんみりして。 可愛くない」

「可愛くない……。 うん、私、すぐ可愛くないよね……」

「 とっても好きで仕方がないのに、なんだか……。」

「問題が重くて……。」

「傷付けてしまうのが、怖い。」

翔馬は、大切な人だから。

恋愛感情では無いのは、和葉が近くにいる今、はつきりと分かる。

だけど、大切だ。

嫌われたく、ない。

好きだ、と言われた時、嬉しくなかつたかと言えば、嘘になる。

でも……翔馬は、お兄ちゃんで。

その関係は、何があつても、壊せない。壊したらいけない。

それでも、恋愛じゃなくとも、和葉さんがあの夜現れなかつたら……翔馬の想いに応えようとしていたかも、しれない。

それが一瞬の気休めでも、“家族”を壊したくないから。

もう……私のワガママで大切な人たちを傷付けるのは……。

「もひ、嫌……」

あふれてきた涙と共に、言葉も心から外に流れた。

瑠璃花に背中を撫でられ、私はゆっくりと眩いでいた。

「今日、家…帰るね」

和葉は自宅で一人、スパークリングワインを呑んでいた。

もう嫌……。

丁度、見えた。苦しそうな顔で、涙を流していたリサ。

仕方がない…………？

慰められているのが格好悪くて、つい責めるような事を言ってしまった。

リサが悪いわけないって、わかってるのに。

でも、どうしても考えてしまつ口トがある。

リサが俺を選んだ理由…………。

多分……、そのコトを考えてしまつせいで、リサを、好きだと認められない。自分が傷付きたくないのかも知れない。

あとさ、8歳差とか……ねえ？

……ホストなんか、しなきゃ良かつたかな。

自分に、心に……。

素直になれないよ。

「めん、リサ。

リサが嫌なら、俺は……。

朝。

翔馬が誤魔化してくれていたため、昨日は別に疑われる事もなく普通に両親と家で過ごした。

ただ、翔馬は大雅の家に泊まりに行つたためあまり顔を合わせることは無かつた。

モヤモヤが晴れないまま、見慣れた教室の自分の椅子に座る。

クラスメートが騒ぐなか、ガラツと部屋に入ってきた女に、リサは目を丸くした。

「リサちゃん。城之内先生じょうのうちさんが呼んでたよ~」

「え? なんだろ」

あわてて箸を置いて立ち上がったリサに、一緒にいた萌歌もかが微笑みかけた。

「初日だしね。リサちゃん、委員だし」

「はあ……。行つてきます」

急いで廊下に出たりサは勢い余つて人にぶつかりそうになつた。

「……すいませんつ……。……………柚樹先輩」

大雅は軽く笑つた。

「よ。どうした? んな急いで」

「あ、えつと、城之内先生に呼ばれて」

リサの言葉に、大雅は顔を厳しくした。

「は? 城之内……。マジかよ」

最悪の読みが当たつた、というふうな顔をする大雅に、リサは瞬きした。

「えと……。柚樹先輩お知り合いだつたんですか?」

前の先生が持病で入院したため、城之内が新しい音楽教師になつたらしく、リサはまったく面識が無かつた。

「いや……。名前知つてただけ……。 分かった。 行こ職員室。
俺も用があるからぞ」

はあ。と首を傾げるリサの横を歩きながら、大雅は険しい表情を崩す事は無かつた。

「……ああ、綾瀬さん。 あら? 貴方は……」

背中まで伸ばした髪をハーフアップにして緩く巻いた城之内は、リ

サの後ろで立つてゐる大雅に微笑みかけた。

大雅も軽く礼をする。

「3・Aの柚樹です。初めまして、城之内彩乃先生」

城之内は少し不審な目を大雅に向けたが、すぐにリサに目を戻した。

「うん?……まあいいわ。この資料を運んで欲しいのよね、次の授業で使うの」

「はい、分かりました。……え」

手を伸ばしたリサより早く、ひょいと大雅が教材の山を持った。

「いや、良いですって柚樹先輩」

城之内も言つ。

「そうよ?私は委員の綾瀬さんに頼んだだけなのに」

その言い方に少しカチンときたりサは大雅の持つてゐる教材に手を伸ばしたが、簡単に避けられてしまった。

大雅は軽く城之内に微笑みかけた。

「俺、リサの下僕なんすよ。だから一ーンです」

「はあ!…ちょっと先輩なに言つて」

城之内は、軽やかな笑声をたて、頷いた。

「成る程。じゃあよろしくね。もう行っていいわよ」

大雅の発言による他の先生たちの目が痛い。

「…失礼します……」

リサは顔を真っ赤にして職員室を出た。

「つ…柚樹先輩…なんであんなこと…?」

「ごめんって。ああそれよりリサちゃん、一つ約束して欲しいんだけど

「…なんですか？」

真剣な雰囲気に、リサは大雅の目を見た。

「俺も気をつけるけど、これから城之内に呼ばれたら俺を呼んで。絶対に一人で会うなよ」

いきなりの言葉に、リサは戸惑ったが頷いた。

「わ、かりましたけど。なんですか?」

「……あの女には気を付けろよ。マジでね」

教卓にテキストを置いた大雅が教室を出るのを見送つたりサは眉をひそめながら、少し気になつて大雅が運んでくれたテキストを持つてみた。

「……おおや

俺が十歳の時。

俺の母とリサの父親が正式に再婚したのはリサが高校生になつてから。

だけどその当時俺の両親は三年前に離婚、リサの母親も数年前に亡くなつていたから、同じ職場だつた二人が惹かれあつたのは必然的だつた。

けれど……。

その頃、たつた八歳だつたリサは、環境の変化に心がついていかなかつた。

「ほら翔馬、綾瀬さんとリサちゃんよ。」挨拶しなさい

遊園地で俺達は初めて会つた。

水色のワンピースを着たりサは、俺と俺の母を見て、満面の笑みをサツと曇らせた。

父親に隠れるようにして泣きそうに俯く。リサの父親も、困惑したよびに苦笑した。

母はキュッと俺の手を握り、リサの父親に笑いかけた。

「『めんなさいね、私たちは別行動をするから』

「いや……。ほらリサ、失礼だろう、顔を上げなさい

ふるふると首を振るリサに、母は小さく微笑み、俺の手を引いて観覧車に乗った。

観覧車の中から、リサが泣きながら小さな拳で父親を殴っているのを見ながら、母は悲しそうにため息をついた。

「やつぱつまだ、卑かつたかしらね……。翔馬、貴方はビリ~」

「別に……」

30分ほど経つて、父親に説得されたのだろうリサたちと合流し、幼い子供専用の遊具がある公園で、俺とリサは一人で遊ぶ事になった。

その近くのベンチに座った親たちがなにやら話し込んでいるのを気にしてまた泣きそうに顔を歪ますリサに俺は話しかけた。

「ねえ。遊ぶ？」

「…………うん」

それからも、俺とリサはちょくちょく会つた。

だが、ある日。

母が俺を連れてリサの家に行つた時、それまでおとなしく座つていたリサがサッと立ち上がりつて、そのあどけない容姿には似つかわしくない暗い顔で呟いた。

「お母さんが、かわいそつ。リサがお母さんと一緒にいる。お父

さんは、由梨さんがいるから大丈夫でしょ？」

唖然とする俺達を残し、リサはリビングを出でいった。

呆然と座っていたリサの父親より、顔面蒼白だった母が早く動いた。

「待つて！」

リサの様子になにか悪い予感をしたのか、走つてリサを追いかけた母を、俺と父親は慌てて追つた。

「リサちゃん！？」

案の定、リサは小さな、でもリサが持つと危険を感じさせるナイフを握りしめていた。

俺達に気付き、ソロソロ後ずさる。

「リサちゃん…………それを離しなさい」

「り、リサ」

二人が鋭く、震えた声をリサに向け、リサは怯えたように首を横にふった。

「だつてお母さん、天国でひとりになっちゃうもん。だから、リサがそばに行く。私はこんなところにいたくないっ！」

「リサ……」

父はぐたくたと座り込んだ。

それをちらりと見た母は、ゆっくりとリサに近付いた。

「来ないで」

「……」

少し微笑みをリサに見せながら、母は近付く。

「大丈夫よ……」

その時だった。

後ずさるうとしたリサはバランスを崩し、転んだ。

「リサっ！」

「リサちゃん！」

俺はリサのシャツが紅く染まるのを、ただじっと見ていた。

ドアの開く音で振り返った和葉に、入ってきた瑠璃花は鼻を鳴らした。

「残念やつたね。私で

「……。別に」

和葉の背中に瑠璃花は軽く独り言のように語る。

「城之内彩乃？接觸してきたみたいやで。大雅さん情報」

「……マジかよ」

「美術教師やで。調べてみたら、城之内って大出でるみたい。リサのことはバレてるな。なんでか知らんけど」

和葉はため息をついた。彩乃是元高級クラブのホステスだつただけあつて、その情報網は凄まじい。

「なんかされたんだ？」

「軽い嫌がらせ程度で、リサは全く気にしどりんみたいやけどね」

「そつか……。はあ～面倒だな」

「いやいや。どーすんのよ」

和葉はしばらく黙り込んだ後、瑠璃花を不思議そうな目で見た。

「前から言おーと思つてたんだけど、なんでそんな親身になつてくれんの？」

「あかん？」

「いや……心強いけど。そういうの面倒くさそうだから」

瑠璃花は軽く笑つた。

「ほー…。やうなんやけどね。暇つぶし?いいやん、人の好意は素直に受け取つとモ」

「…」若狭さんです

話ながらも、和葉は綺麗なホールケーキを遊ぶよつた手つきで完成させた。

瑠璃花は感心してため息をついた。

「上手いよなー…。剛さんとか翔太とかが作るのも綺麗やけど、和葉さんはなんていつか…見てておもしろい」

「なにそれ」

「いや、讃め言葉やけど」

作ったケーキをしまった和葉は腕をくんだ。

「どうすればいい?」

知らんがな、と声こわいになつたのをぐつと堪えて、瑠璃花は口を動かした。

「色々な感情を抜きにしても、城之内のことは和葉さんができるかなあかんやうな」

「色んなねー…。翔馬くんは?」

瑠璃花は考えながら和葉を見た。

「私は、翔馬が悪いヤツとは思わん。つてこつかめつちや不憫や。
……やけど、リサは和葉さんが好きなんよ?」

「知つてゐる

「じゃあ、なんでいつも一歩ひいてんの。好きやろ、リサ」

和葉は洗った手をふきながら独り言のようになつた。

「なんでかな」

「は?」

「なんで俺なんだろね」

眉間にしわを寄せたまま瑠璃花が厨房を出でていって、和葉はカタンと椅子に腰かけた。

翔馬とあまり顔を合わせないまま日々は過ぎ、今日も大雅と一緒に城之内先生のお使いをしていた。

今回は美術室の掃除。

ホウキで掃きながらふと外を見ると、弁当を食べる翔馬の姿が見えた。

美術室は6階にあるのであまりよく見えないが。

ただ、いつもと違う様子にリサは息をのんだ。

「え……？」

数人の男子と一緒にいるのはいつもと同じ。

だけど……。

笑っていた翔馬の肩にその白い手がかかり、キスが落とされるのをただ見ていたリサに、大雅はため息がちに言つた。

「……彼女じゃないよ。女友達って感じ。向こうはどう思つてるか知らないけどね」

カラーン、とホウキを床に落とし、美術室を出てこいつとしたリサの腕を掴んだ大雅は、静かに訊いた。

「…どうしたの、リサちゃん」

「…………」

「いいじゅん、別に翔馬が誰とキスしようが。だつてリサちゃんは和葉さんを選んだんだよね。違う？」

強引に腕を引き、こちらを向かせた大雅は、涙でぐしゃぐしゃになつたりサの顔を見て苦笑した。

「妹ちゃんは、ワガママだね？」

「…………私は……」

黙り込んだリサに、大雅は唇を近づけた。

「え、ちょっと」

「んっ…………ふ…………」

吃驚するほど優しいキスに、リサは困惑した。

唇が離れて、呆然とするリサに、大雅は軽く首を傾げた。

「……無防備だな、リサちゃん。…………で？」

「…………え？」

「決めた？自分のキモチ」

リサの瞳が揺れ、リサは目を見開いた。

「……あ……」

走つて美術室を出でていったリサは、少しして振り返つた。大雅に、泣きそうな顔で言つ。

「ありがとうございました。私、柚樹先輩のおかげで……」

「いいから、早く行きなつて」

「はいっ」

微笑みを浮かべたリサは、走り出した。

……分かりました、柚樹先輩。

自分のキモチ。

大切な人。

ありがとうございました。

目的の場所は、一つ。

リサは一心不乱に走つた。

……。

カラソ、とホウキが床を鳴らし、大雅は床に座り込んだ。

結局、俺は何をやつてるんだろうか。

親友の長く辛い片想いも、……自分の恋も。

(どうちも終わらせちまつたな……)

後悔はしない。

だけど、不安は、ある。

カツン、ヒールがフローリングの床を鳴らした。

茶色の緩く巻いた長い髪が、不機嫌そうに揺れる。

「どうじうことかしら。綾瀬リサは、貴方の彼女じゃないのね？私を騙したの？」

「……なんのこと？」

立ち上がった大雅は、腕組みをした彩乃を見た。

「黙つて下さいよ、先生……」

薄笑いの形に歪んだ唇を、塞ぐ。

長く、絡めどるような時が終わり、大雅は切なげな目を彩乃に向けた。

微笑んだ彩乃は、嘲笑の混じった瞳で大雅の頬に軽くキスした。

「残念ね……。もう少し、嘘くらう上手くなつたほうがいいわよ、
子猫ちゃん」

フツと耳に息を吹き掛け、彩乃は美術室を出でていった。

「はあっ……」

息を切らし、走つてきたりサに店の外を掃除していた和葉は本氣で
驚いた。

「え……学校？」

「さ、サボりました、多分……」

「はー? なにそれ、どーした、何があった! ?まさか彩乃に」

青い顔で肩を掴んでくる和葉に、リサは微笑んだ。

ギュッと抱き付く。

「好きっ……」

「…………リサ、お酒でも呑んだ?」

ふるふると首を振つたリサは、抱き付いたまま、和葉を仰ぎ見た。

「さつき、お兄ちゃんが知らない女の先輩に、キスされてるの見て、嫌な気持ちになりました」

「……ほお」

「……柚樹先輩に、キスされました」

「……へえ。マジか」

「キスされて分かったの……私、和葉さんが好きです……。キスされてる時、これで和葉さんに嫌われるんじゃないかなって……一番、思つて……怖かっただす……。……無防備でも、嫌いにならないで……？」

「……馬鹿。心配しちだろ……」

和葉はリサの手を引いて店に入った。
知らないバイトの人気が驚いたような顔でこっちを見ているのをまるで気にしないで、和葉は誰もいない厨房に入った。

部屋の奥で、リサを抱き締め、ズルズルと座り込む。

「！」めん……

「え……？」

泣きそうに顔を歪めたリサの額に、和葉はキスを落とす。
もう、遅かった。

どんな心配があつても……たとえ、俺を選んだのが翔馬を好きにならなかったための……無意識の一時しのぎだったとしても。

リサを、自分を……信じたい。

「俺も……好きです。リサのことが。…………言ひの遅くなつて、『」あん

「……

「いえ……。嬉しい、です」

赤面した和葉はグシャグシャとリサの髪を混ぜた。

そのはずみで和葉の手首の銀色の細い鎖も涼しげに鳴る。
でも、もうそれはリサにとつて不安要素になることはないだらう。
いつもと違う赤い顔をする和葉。

どんな物より、誰より、大切な人。

「……恥ずい。こんなちゃんとした告白、初めてだ……」

それからじしまりへ落ち込んでいた和葉は、ゆっくりリサと皿を合わせた。

「俺……かなり嫉妬もするし、元々。・2ホストだし、一位だったし……ぶつちやけ容姿以外、あんまり良いことこのないよ……?」

リサは花のような笑みを浮かべた。

「私だって、無防備ですし。和葉さんと違つて容姿も良くないです」

「リサは今まで会つた女の子の中で誰より可愛いくよ」

「……ありがとう」

そんなことまで、じつと瞳を見つめて言つかり、顔が赤くなるのが分かる。

「ただ無防備は……。なおしてね。さすがに学校にまで俺行けないし。学校に瑠璃花みたいなのもいないし」

「大丈夫ですよ」

「どうからくるんだその自信は……」

はあ、と和葉はため息をついた。

だけど、腕の中のリサはあまりに可愛くて。

どうしたらいいか分からなくなつて。そつと、優しく、リサの頬にキスをした。

lovesickness20・和葉（前書き）

これは今から四年前の、和葉のホスト時代のお話です。
……吃驚ですが、当時リサは12歳ですね（^_^;）

和葉は20歳。

秀は23、正宗は22です。

月曜日…俺の一週間は、朝6時から。

まだ少し暗い窓のカーテンを開け、着替えて歯を磨き、朝食の用意をする。

いつもならパン派なのだけれど、昨日正宗にお土産で漬物をもらつたから、久しぶりに飯。

「いただきます」

「…………」

食器を片付け、洗面所に向かう。

今日は一週間でかなり大事な日。

家事！――

たまつっていた洗濯物を洗濯機に押し込んで、掃除機をかける。

あー…俺掃除好きだわ。

科学雑巾を使って隅のすみまでホコリをとる。

もう少しへ…と思つていたのに、ピーンポーンとチャイムが鳴つた。

「和葉あ～」

次いでドンドンビードアを叩く音。

俺としては無視して掃除を続けたい所だけれど、近所迷惑を考えると…。

ガチャリ。

「おっはよー」

「…はよ。お前…。毎回毎回借金取りみたくドア叩くのやめ……おい」

「お邪魔しまーす」

楽しそうに俺の家に入った正宗はいつもの定位置に座った。

「だつて今日は和葉の担当の日でしょー? 昼飯。もつすぐ秀さんも来るし」

和葉は壁にかけた時計を見た。

「あー…もう一〇時か。よつしゃ作ろ」

パスタでいいかなー。

エプロンを付けていると、ピンポーンとチャイムが鳴った。

急いで出る。

秀は、よつ、とほにかんだ。

「秀～。入つて。今から作るから」

「あ、秀さん来たー…どうするゲームでもしど〜?こいつあるし」

「いは俺の家だ」

俺の眩きに少しひく笑つた秀は正宗の隣に腰を下ろした。

「じや、遠慮なく」

「あつ、和葉～早くメシー」

「おーい??」

「そ、じゃあまた後でなー」

「おー」

食べ終わつて三人仲良く手を合わせる。

職場も一緒に、マンションも同じ階。毎週のこの時間は三人ともた
いてい暇なので、最近は交代制で昼飯を作っている。

三週間に一度の担当とはいえ、結構疲れるなーと思しながら振り返
ると、バチッと秀と目が合つて思わず後ずさつた。

「おお！なんだよまだいたの秀つ」

「うん……和。相談があるんだ」

普段、仕事の時さえ表情が豊かと言つわけではないが、それでもいつもと全く違う、暗く神妙な面持ちで秀は口を開いた。

「…………実は一

18時。ラフなパークー姿で俺は店に裏口から入った。

一回目の留学資金と、小遣い稼ぎのつもりで働き始めてはや5カ月。いつの間にか20・2になってしまった。

スーツに着替えて鏡のまえで適当に髪を整え、俺は息を吐いた。

「こんにちは、カズハです。この店に来るのは、初めてかな?」

緊張した面持ちだったその若めの客も、俺と話すうち表情が和らぐ。酒を作りながら上田遣いで笑いかけると、彼女は頬を染め、俯いた。

変なクレーマーより、じついう客は楽だし可愛らしい。

談笑していると、少し離れた場所にいた正宗とバチッと目が合い、思わず顔をしかめる。

それに気付いて驚いた顔をしている客に慌てて微笑みかける。

「あ、『」めんね、気にしないでいいから……酒足りてる？俺まだ呑めるよ」

20になつてからこの世界に入ったが、酒はけつこうにける。ただ、ドンペリは不味いね。馬鹿みたいに高いけどさー。

指名が入り、席を立つ。

歩きながら、客と微笑みあう秀の姿が見えた。

いわゆるお坊ちゃんで、外の世界をまるで知らなかつた俺に「」で生き方を教えてくれたのは、当時も今も「」の、秀。立ち居振舞いから指名の取り方まで、親身に教えてくれた。

たまたま同じマンションで同じ階だつたから、仲良くなりやすかつたのかも知れない。

俺だつてよくみるお隣さんが「」・「」ホストだなんて知らないくて、最初は正直ビックリした。

だって、一重人格とかでも無いんだよあの人。

いつもあんまりレパートリーの無い表情をして、静かに喋る。口数も少ない。

でもあの人の客は何故かいい娘が多くて、トラブルも少なそうで羨ましい。

この店がかなり雰囲気が良いってことに少し昔に気付いた時は、秀の存在の貴重さに本当に感嘆した。
居るだけでいいんだよね、多分……。

その秀を尊敬するホストは店外でもけつこうくるんだけど、俺が来

るずっと前からこの店で働いていた正宗もその一人。

俺と秀が同じマンションって知つて、羨ましがつた挙句引っ越して
きた。

あのマンションの16階には、apple・のNO・3まで集まっ
てるんだよな。

自分たちでもかなり不可思議な現象だと思います。

正宗とか秀は能天気に喜んでるけどね。

まあ、賑やかでいいんだけじさ。

他愛ない事を客と話ながら、俺はむつき秀から受けた相談内容を思
い出していた。

どう考へても不可解極まりない。

……何があつたんだろうか。

「……うわあ」

思わず呟いてしまった。

相談を受けた次の日、丁度祝日で店は休みなのだが……。

事情を知った正宗もついてきたので、一時間前から男三人、まばら
に釣り竿を持つている人とか以外あまり人のいない海に、來ていた。

砂の上にシートを引いて隣に座った正宗が恐る恐る訊いてきた。

「なあ、あれ……。秀さんだよね……？」

「他に誰がいるんすか」

「…………なんか言いたいことがあるって何言って良いかわかんないんだけど俺……」

「…………俺もだつて」

俺は昼の太陽の眩しさに辟易しながら、清楚な薄緑のワンピースを着た女とイチャイチャしている秀を見た。

普段ないくらい緩んだ顔と伸びた鼻の下にイラッとする。

(ついてきてくれつてさ……。なに、なんの為に?)

「どつかのタチの悪いホステスとか、そういう女に会いに行くのかと思つてたよ俺……。うわーなに秀さんのあの顔。つてか彩サン? けつこう美人だけど和葉、見たことある?」

「ねえよ。つてか俺らはなんの為に来たんだ……」

そんな事をグチグチ言つていると、秀の手を引いたその女がこっちに来た。

思わず身構えた俺と、瞬時に接客スマイルを浮かべた正宗に彩は微笑んだ。

「そろそろお昼ですね、『ゴハンでも行きましょうか』

まあ、賛同以外出来なかつた。

で、その日帰つてからも、何度か四人で遊んだり、時には正宗がいなくて三人の時もあつた。

正宗がいないう時は俺も遠慮しようとしたんだけど、秀が、和が来てくれたほうがあいつも喜ぶとか言うから行つてたんだけど…。

なんか変だな、と思つたのは三人で遊んだ2回目の時。

秀が席を外した時、彩とかいうその女がこんなこと訊いてきた。

「カズハ君、このまま一人でどつか行こつか？」

「……はい？ からかわないで下さいよ。秀の彼女にそんな事言われたらさすがに驚きますって」

……その場は、笑つて収まつたけどさ。

後日、仕事前に正宗から耳打ちされた事も気になつた。

『秀さん、彩サンに相当金使つてるみたい…。大丈夫かな、なんか俺…彩サン、ヤバそうな気がして……』

「ああ……そうだな」

正宗は、女に対する直感が鋭い。

秀なら大丈夫だろ？と思つ反面、正宗の心配もわかつた。

こういう仕事上、彼女＝都合の良い密みたいな……。

店でお金を使つてもらう為に、キミは俺の彼女だよ、的な発言・行動は、正直、よくある戦略。

だけど、彩が店に来たのを見たことは無いし、同棲している訳でもない。

そして、俺に対するあの行動。

理解出来ない事ばかりで、気持ちが悪い。

思い切つて秀に、止めといた方がいいと直訴しても、苦笑いを浮かべて

「うん……。でも、ほつとけなくてさ」

と、言つばかり。

仕方なく、俺なりにツテを使って北浜彩きたはまあやについて調べてみた。

すると。

北浜彩あやというのは偽名、本名は城之内彩乃で。……この街の高級クラブ、朔良さくらうのホステスだつて、分かった。

見かけた事はあるはずなのに、普段と化粧方法が違つて、分からなかつた……。

もつと早く調べておけばと後悔すると同時に、彩乃の正体に愕然とした俺は、制止する正宗を無視して彩乃に連絡を取り、指定された場所へ向かった。

カードキーを使い、室内に入る。

ホテルの一室。そんな場に呼び出した時点で、一から動きはバレたようだといふことはわかつた。

バスローブ姿の彩乃に、俺は薄く微笑んだ。

「こんばんは、彩乃サン」

「こんばんは、カズハ君。で、言いたい」とて何かしら

「わかつてゐくせに……。まあ、面倒くさい事は訊かない。俺としては、秀と別れてくれればそれでいい。一度と姿を表すなつてどっこな？」

彩乃是耳障りな高い声で笑つた。

「そうね、そろそろ飽きてきたし。私はカズハ君に近付ければよかつたのよ。まあ、apple の no · 1 って言うからどんなにかと一応あいつにも期待してたのに。ハズレもいいとこね……」

「……正直、ビックリだ。アンタなんかにうちの no · 1 が惚れるなんてね」

彩乃是ふふっと首を傾げた。

「…………さて、別れてあげても良いけど、条件があるわ？」

和葉は口角を上げた。

「ん？ なんでしょう」

彩乃は妖艶に微笑んだ。

「……私を抱いて？ お金はあげるわ。枕営業くらいした事あるわよね？」

「枕ね……あるけど。そんなんでいいんだ」

彩乃が座っていたベッドに腰かけ、完璧な所作で彩乃の唇をついぱむ。

…その瞬間。

パシヤ、と乾いた音が鳴った。

和葉の鋭い眼光を受け、彩乃はコロコロと笑った。

さつさと棚の奥からカメラを取り出す。

「さて、撮れた。……どうする？」

和葉は背筋が凍るのを感じた。

(はめられたっ……)

顔がこわばった和葉を面白そうに彩乃は眺める。

「やあね、強請りなんてしないわよ？…カズハ君が私を彼女にすればいいだけよ。そしたらネットに流出もしないし、」

彩乃の得意気な声がピタッと止まった。

和葉も彩乃の目線を追う。

そこににはー…。

「秀、……」

呆然とした和葉の声に、秀の後ろにいる正宗が和葉の方を心配げに見詰めてきた。

だが、彩乃と和葉の意識は、少し猫背で俯き前髪で表情が隠れた秀にあった。

「彩乃……、やつぱダメ…か？」

一瞬、ビクッと小さく体を震わせた彩乃是優艶な笑みを浮かべた。

「「めんなさいね、秀」

そのまま黙った彩乃に一つため息をついた秀は、ぐるりと俺達に背を向けて部屋を出ていった。

「待つて！秀！」

秀を追いかけた俺に、正宗も慌てついてきた。

エレベーターのすぐ近くで俺は秀を捕まえた。

「秀、秀。俺はー…」

「わかつてる……」

俺は、もう何も出来なかつた。

小さく呟いた秀にー…。

いや。違ひ…。

初めて、俺に嘘笑いを見せた、秀に何も…。

それから、俺はすぐにapple を辞めた。

それで、マンションも売り払おうと思っていた矢先、秀から短い手紙が来た。

正宗が、届けてくれた。

内容は、あの事には全く触れず…。

ただ、前から引っ越しやうと思つていてもう部屋も決まつてゐるから、お前はそこにいて、というものだつた。

いつか会いに行く、と。

秀の新しい住所は書いてなかつた。

……結局、俺は今でも待ってる。

彩乃が引き金になつたとは言つても。

多分、俺の弱さのせいでー…、大切な友人にさえ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7236m/>

赤い糸

2011年10月7日00時46分発行